

合 同 小 説 本

vol.7



目次

(著者名は敬称略)

23の奇跡

著者：R I D E 3

表紙イラスト：霞煌
本文挿絵：ピーすけ

さくらいろ無修正

著者：ロッキー・ラックーン 11

贈り物？

著者：torbion 20

それはまるで魔法のよう

著者：タツキー 22

無彼夢中につき無我夢中なう

著者：きは 30

なんでもするよ！

著者：充電池 34

著者あとがき & メッセージ

62 公開サイト：ひなゆめファンの止まり木
<http://soukensi.net/perch/>

編集後記

68 クイズ企画の趣旨説明と結果ページ

奥付

68 <http://soukensi.net/perch/sp/quiz07/>

23の奇跡

著者…R I D E

その日、日本は緊張に包まれていた。
白皇学院も、その例外ではなかった。

一年生のとある教室。

そこでは、一人の教師がむせび泣いていた。生徒たちも、教室内の空気に圧されて口を閉ざしていた。

時計が、九時を指した。

それと同時に、廊下から足音が響いてきた。教室にいるもの全員がそれに耳を傾ける。

教室に、一人の女性が入ってきた。

「やだ先生、皆さん理事室にお集まりになっています」

女性は微笑しながら言うが、先生はそれどころじゃない。
い。

「そんな、私はどうなるんですか？それにこの子たちだ
って…」

「先生、理事長がまっておられますよ」

柔らかく、しかし威圧を含んだ声音に教師は怯み、足
早に教室を出て行ってしまった。

これにより、教室の緊張感がより増していった。

「今日から私が、このクラスの先生よ。よろしくね」

女性は笑顔を見せると、スピーカー付きのプレイヤー
を取り出してそれを起動させた。

「これから毎朝、外国のいろんな曲を聞かせてあげたい
んだけど…」

それは、外国の賛美歌だった。毎朝聞いてもらうと言
われても、いきなりのことに生徒たちはどうこたえてい
いか戸惑う。

「そっかあ…」

すると女性は、悲しそうな顔を見せた。

「先生が選んだ歌は嫌いかあ…」

シヨックを受けたように顔を俯かせる。だがこれは女
性の狙い。

「いい曲だとは思うけど…」

「そうよねえ…」

ばつが悪そうに感じたので、一部の生徒たちが一応曲
を褒めると、女性は嬉しそうな顔で生徒たちに迫った。

「本当!?ありがとう!」

一方的に押し付けるのではなく、良心に響かせる。手
を握り感謝の意を示された生徒は、思わず微笑をしてし
まう。

女性の狙い通りにいった。ここまでは。

「悪くはないんですけどねえ…」

尚も不満そうな声が聞こえたので、そちらを向いてみる。

「なんというか、何か足りない気がします…」

そう言っているのは…

「文的には、こんな曲がいいと思うのですよ」

そう言って、生徒の一人、日比野文は立ち上がってあろうことか歌いだした。

突然歌い出したのだから呆気にとられてしまいが、プレイヤーが流れる曲をかき消すような大きな声で歌うのだから、女性も周りの生徒たちもいい顔をしていない。

「ちよ、ちよっと日比野さん、止めて…」

頭に響いてくるので耳を抑えながら女性が制止しようとする。それにも構わず、文は熱唱している。気持ち良さそうに歌う彼女は自ら止める気はなさそうだが…。

「うるさいわよ、文ちゃん」

近くにいたクラスメート、シャルナが鉄拳で止めさせた。

「す、すみませんシャルナちゃん…」

教室の空気が異様なものとなってしまふ。誰もが口を閉ざしていた。

女性は咳払いして、注意を自分に取り戻そうとする。

とりあえず、プレイヤーは停止させた。これを流しながら話を進めれば落ち着くはずだったが、これ以上音楽に触れるのはまずかった。また歌われては困る。

「先生の名前は鈴木恵美です。みんなよろしくね」

そう言って、生徒たちに再び笑顔を取り繕う。

「クラス委員長の〇〇さん、至らないことがあるけどよろしくね」

名前を呼ばれた〇〇は、目を丸くした。

「なんで、私の名前…」

「そういえばさっき、日比野さんの名前も知っていたよね…」

疑惑が漂う中、鈴木は笑顔を崩すことなく答えた。

「職員室にはね、皆のことが全て書かれた紙があるの。私はそれを全部覚えてきたのよ」

全部書いた紙と言うのは、個人情報調査書みたいなことだろう。誰もがそれを察して恐怖してしまう。

ただ一人を除いては。

「文のことを知っているということは、文のファンだということですね！」

なんだか理屈が通らない様なことを言っている文。生徒たちは呆れてしまふ。

さつきは疎ましかったが、今度は文に感謝する鈴木であった。先程の発言で皆萎縮してしまったが、この発言で少なくとも心を許してもらええる人ができたのだ。嬉しく感じてしまう。

「文がライフセイバーだということも、当然知っていますよね？」

「ライフセイバー？」

聞きなれない単語が出てきた。文のことについて書かれていたあの紙にはそんなこと書かれていなかった。

「そう。文はライフセイバー。困っている人を助ける正義の味方なのです！」

正義。

その言葉に、鈴木は一瞬顔をしかめた。

「ほう、正義か」

その時、教室に入ってきた男たちがいた。

一人は年配の、官僚みたいな偉そうな男。その後ろには、カメラやマイクを構えている、テレビ局のスタッフみtainな男たちが数人いた。

「あなたは！」

官僚みtainな男を前にし、鈴木は驚きを露にする。

生徒たちもそうだった。なぜならこの男は今日日本を騒がせている男だからである。

「なぜここに？」

「なに、新しくなる日本を国民に少しでも知ってもらおうと思っただけ」

そう言い、カメラマンたちの方を顎で指す。

「生放送だ。くれぐれも粗相をしでかさないようにな」

「はい！」

氣を新たに引き締め、鈴木は再び生徒たちに向き直る。

「この人は先日日本の政治を任せられた人よ。挨拶して生徒たちは思い思いに、男に対して挨拶をした。」

「それじゃあ話を戻すけど、日比野さん、正義ってなに？」

この問いに対して、文は自信満々に答えた。

「決まっているじゃないですか！困っている人を助けることです！」

「そうね。それが正義よね」

女性は諭すように言葉を紡いでいく。

「日比野さんの言うとおり、困っている人たちを助けるのは正しいことです。私たちも、困っている人たちを助けるために日々がんばっているわ」

「じゃあ、さつき先生はどうして泣いていたんですか？」

先程から鈴木のことを睨んでいた一人の男子生徒がここで口を開いてきた。

「先生は泣いていたんじゃないですか。困っていたのになんで助けなかったのですか？」

まるで咎めるような口調だが、鈴木はそれを意に介さず淡々と答えた。

「先生はちよつと間違つた教育方法をしていたからね。それだと皆を困らせることになるから、再指導しなきゃいけないの」

「僕の父さんと同じように、ですか？」

男子生徒は、冷やかかな目を鈴木に向けた。

「父さんは嫌がつていたのに、無理やり連行されました。困らせているのに、どうしてそんなことするんですか？それで困っている人を助けるなんて言えるんですか？」

これに対して、鈴木は男子生徒の傍まで近づき、取りみだすことなく答えた。

「君のお父様は先生と同じ、間違つた考えを正さなくちやいけないからね」

「父さんは悪い思想なんて持つちやいない！」

男子は声を荒げるが、それでも鈴木は冷静だった。

「悪い、じゃなくて間違つているということよ。大人だつて間違いは正さなきゃいけない。そうでしょう？」

筋の通つた話なので、思わず他の生徒たちは頷く。だが、彼はそれで納得できない。

「そうやって、自分たちのクーデターを正当化するんですか！」

そう言い、ある新聞を取り出しひとつの記事を指した。

「この新聞が書かれているように、その男が主導したクーデターをさも正当であるかのようにするんですか！？」

男子生徒が指した先には、途中で教室に入ってきた年配の男がいた。つまり、彼がクーデターを起こしたということなのだ。

だが鈴木はそれを平然と受け流す。

「それはクーデターじゃないわ。国の憲法を変えるための行動よ。国や憲法だって、間違つていたら直さなきゃいけないのは話したわよね？」

言いながら、その記事を取り上げた。

「ですが……」

「この記事は間違つていたので、すぐに訂正の新聞が出されたわ」

そう言いながら、その新聞を忌わしそうに懐にしまった。

周りの生徒は何も言えない。ここで口を挟めば、自分たちも男子生徒同様、家族共々どんな目に遭うかわからない。増してや今、この場には男子生徒が言うクーデタ

ーを起こした主導者がいるのだから。

「そんなことより…」

「でも、それでもこの新聞は間違っていますよ」

しかし、まったく空気を読んでいない奴がいた。

別のものを持っていったのか、文は該当する新聞を広げていた。

「日比野さん。さっき言ったとおり、新聞は訂正されたのよ」

困った顔をしながら鈴木は文の方へと向く。これ以上クーデターの話はさせたくない。早々に打ち切らなければならぬ。

「いえ、この新聞はまだ間違っているところがあります」「何度も言うけど、クーデターなんてものはなかったのよ。これはきちんと訂正された新聞よ」

文の持っているものは、鈴木が取りあげた新聞と同じ日付のもの。文が持っている新聞にはクーデターの記事はない。彼女の持っている新聞は訂正されたものだ。

「いえ、きちんと訂正されていません！」

文がここまで頑固なのだから、鈴木も思わず声を荒げてしまう。

「日比野さん！」

「だって…」

文が新聞のあるところを指す。そこは記事ではなく…

「このテレビ欄のある番組、本当ならブラピ登場なところですが、ブラピ登場と間違っているじゃないですか！」

鈴木だけじゃなく、教室にいるもの全員がずっこけてしまう。

「本来ならこの番組はブラッド・ピットが登場するはずなのに、これではブラック・ビスケッツが登場するものだと間違ってしまうじゃないですか！」

あまりにもレベルの低いいちやもん、鈴木は話題を切り上げようとする。

「あ、あのね日比野さん、いくらなんでもこれは別にいいと思うの。間違っても気づかないようにするっていう思いやりだってあるでしょ？」

「ええ!？」

文は、大きなショックを受けてしまった。

「さっきは間違いは正さなきゃいけないとか言っていたのに、今度は目をつぶれなんて、さっきと矛盾したことを言ってますよ！」

痛いところを突かれ、鈴木の様子は引き吊り始めている。

「そうやって都合の悪いところはごまかそうとする、大人の汚い一面を見ましたよシャルナちゃん！」

あまりにもしつこく言い立て、しかも大きな声で畳みかけるのだから苛立ちを募らせるのは当然。

とうとう鈴木表情から笑顔が崩れていった。

「わかりました！この番組欄も修正すればいいんですよ！」

「恩着せがましいです！恩着せがましいですよこの人！」

「なんですかその態度は！」

思わず声を荒げてしまう。

「鈴木君！」

そんな時だった。ここで年配の男が鈴木を呼びとめ、周りを目で配らせた。

それによって鈴木は思い出した。現在この教室は全国のテレビで生放送されているのだ。相手のペースに乱されて、醜態をさらすわけにはいかない。

年配の男は、こほんと咳ばらいをした。

「えー、ここからは私が話をしよう」

そう言って、男は教卓について話し始めた。

「私は日本を変えようと行動を起こした。今までの憲法では日本は自国を守ることができない。だから私は……」

そこで男は気がついた。皆自分の話を聞いていない。

「皆さん、困ったことがあったらこのライフセイバー、

文に言ってください！」

生徒たちは皆、文の話に夢中になっている。

「人の話を聞け！私を無視するな！」

「お、落ち着いて！」

怒りだした男を、鈴木が必死になだめる。

すぐに怒りは収まったが、このままではまずい。男は次の話をした。

「とにかく、私は皆の願いが叶えることができるような社会にするよう努力しているんだ」

誠実そうな顔で言うのだから、思わず生徒たちは信じかけてしまう。

「だから、先程鈴木先生に異を唱えた彼を私はクラス委員にしようと思う」

「ええ？」

まさか自分が指名されるとは思わなかっただけに、男子生徒は驚いてしまう。

「彼はお父さんを思いやる優しい子だ。その優しさがあるなら、このクラスをもっといいクラスにできると私は信じている」

「いや、でも……」

誉められて悪い気分はしないのだが、中々素直になれない。更に男は言った。

「君がクラス委員で頑張ることができれば、君の望みだつて叶えることができるんだ。お父さんが帰ってくるつていう願いが」

最早男子生徒から反抗的な態度は消えていた。

「…やります、僕やります！」

その様子を見て、男は意を得たりと笑った。

「先程私が話した通り、私は皆の願いをかなえるようにできる社会にしている。だから皆は、私の言うことを信じていればいいんですよ」

生徒たちは皆男の言葉に心を奪われている。これで生徒たちは指導者としての自分を信頼することになるだろう。

そう確信した時だった。ある質問が飛んできた。

「あなたの願いはなんですか？」

生徒の一人から来たその問いに、男は答えようとする。

「それはね…」

するとここで、文が口を挟んできた。

「大金を手に入れることですか？」

「ピンポーン！」

その場のノリで、つい本心からそう答えてしまった。

「何を言わせるんだー！」

怒鳴ってしまうがもう遅い。

これは生放送。既に全国に自分の望みは金だと知れ渡つてしまった。

「い、いまのはジョークだから…」

そう言つてごまかそうとするが、このまま放送続けるのはまずい。鈴木も目で訴えている。

とりあえず男はカメラマンに放送を止めさせるように告げようと、カメラマンを振り返つた時だった。

「えー皆さん、私は日比野文です。どうぞよろしく」
なんと文がいつの間にかカメラの前に立っていたではないか。

「な、何だね君は！」

「困っている人を助ける、ライフセイバーです！」

「いや、そうじゃなくてだな…」

さつきからこの少女に水を差されてばかりで、段々とイライラが募つてくる。それに構わず文は話しかけた。

「これだけのカメラ、いくらしたんですか？ 一台如何程万円のものなんですか？」

「いや、これは…」

「わかりました！ きつと誰かから貰つたんですね」

とうとう苛立ちが抑えきれず、平常心が切れてしまった。

「カメラなんか私は貰っていない！」

彼はそのまま本心をぶつけてしまう。

「貰ったのは部下たちの金だ！それだって奴らをだまして私腹にしようとしたわけじゃ…」

「わー！わー！」

鈴木が大声を出してかき消そうとしたが、無駄だった。

「おいおまえ！俺たちの金を全部自分のものにしたっていうのかよ！」

隣の教室から男が一人こちらに詰め寄ってきた。どうやら鈴木と同じ役割のようだが、そんなことは今関係ない。

「あれは国のために使うんじゃないのですか！」

警備をしていたであろう、軍服を着た男も反対側から姿を現した。

そうして一人、また一人と増えていき、たくさんの人間に囲まれた男と鈴木は、どうする術もなかった。

そんな中で、文は一つ気づいた。

「あ、23分経ちましたね」

その後。

この放送がきっかけで指導者は弁解が下手になり、次々とぼろを出すようになる。

それによって指導者から離反するものが出現し、政権は分解。それを機に前政府が権力を回復していく。

クーデターは、三日天下で終わってしまったのだった。

「さあ、今日もライフセイバーとして、困っている人たちを助けにいきますよ！」

しかし、そんなことは文に関係なかった。

そして、国を揺るがしたきっかけがこんな少女だったということに、誰も興味を抱かなかつたのだった。

さくらいろ無修正

著者：ロッキー・ラックーン

ていないのは原作からの設定。

【まえがき】

今回も、クリスマス合同本と同様にハヤテ以外の作品からアリスちゃんに登場してもらいました。まずは簡単に紹介します。

「アリス・カータレット」…今回のSSの主人公。『きんいろモザイク』のメインキャラクターの一人。日本にホームステイ中のイギリス人女子高生。見た目は完全に小学生だけど女子高生。生粋のイギリス人でありながらも日本が大好きで、猛勉強の甲斐もあって特に訛りも無く流暢な日本語を話せるようになる。ただ人見知りな性格のため、知らない人に突然声をかけられたりすると自己防衛のためにカタコトな日本語を使うようになってしまふ。ちなみに、作中でアリスちゃんが頻繁に語る「シノ」なる人物は、ホームステイ先の日本人のお友達。

日本を愛しているが故の行動が変わり者扱いされてしまふのもしばしば。今回は、その変わった行動が運命の出会いをもたらす事になる。ちなみに、携帯電話を持つ

「九条カレン」…彼女も『きんいろモザイク』のメインキャラクターの一人。イギリス人と日本人のハーフ。「○○デース」というギルバートの話し方が特徴。誰とでもすぐに仲良くなれる明るい性格の持ち主で、ハヤテメンバーともすぐに意気投合。夕食作り中の際にアリスちゃんの遊び相手になっていたため、きんモザメンバーではアリスちゃん以外で唯一の登場となった。

「貸コテージでの旅行」…自然豊かな場所で自由に過ごせるのが魅力。昼間は山・川・海など近くの自然で存分に遊び、コテージに戻ってきたらバーベキュー、花火、星空を観たりなどするのが定番。ハヤテ一行・きんモザ一行の利用するコテージは隣同士のため、アリスがいなくなつて困っている一行にハヤテが声をかける事案が発生。一緒にいたアリスちゃんのお金髪縦ロールが金髪フェチのシノにドストライク。そのまま交流が始まる。きんモザ一行には料理の戦力がいないのでハヤテ一行と合同で夕食を作る事に…。

それでは、どーぞ！

ハヤテファンの皆さん、こんにちは！アリス・カータレットといいます。イギリスから留学中の高校二年生です。

私は日本でたくさんの方ができました。元からの友達だったシノとカレンに加えて、アヤにヨーコにイサミに、新しいクラスみんな：毎日が楽しいです。でも友達だからといって、その全てを理解して認め合う事が出来る訳ではありません。特に、他の人とはちよつと違ったポリシーを持っていたとしたら、友達はそれを直してあげようとしてきます。

今回は私のちよつと変わったポリシーを共有してくれ「心の友」との出会いのお話を聞いてください。

【 さくらいろ無修正 】

今日は休日を利用してみんなで山に来ています。この前に行った時は日帰りだったけど、今度はコテージを借りて、お泊まり会をしようという事になりました。のですが：

「もう、皆なんで私からはぐれちゃうかなあ。迷子にならないように気をつけてってあんなに言ったのにく……」

そう：私以外の四人が全員はぐれてしまったのです。すごく綺麗なチョウチョが飛んでいたのを見つけた私がちよつと追いかけている間にこつぜんと。出発する前にあんなにはぐれちゃダメだよって言ったのに：みんな山を甘く見すぎだよ！！

とりあえず焦っても仕方が無いから、チョウチョを見失ってしまったところにあったこれまた綺麗なお花を摘んでます。後でシノにあげようかな〜♪

「あ〜……」

「Wow!!」

急に声をかけられてしまったので、思わず英語が飛び出してしまいました。振り向いてみると、私と同じ年の頃の女の子が立っていました。

「アレ、外国人!?…What are you doing here? (こんな所で何をしているんですか?)」

「ワタシ、ニホンゴ、ダイジョブデース!」

その女の子は私の姿を見て、とっさに英語で対応してくれました。すごく嬉しかったんだけど、知らない人だったので、思わず片言の日本語で返してしまいました。

「あら、よかった。驚かせてしまってごめんなさい」

「アナタ、ワタシニ、ゴヨーデスカ?」

「あ、いえ。こんな山の中で女の子一人で何をしてるのかな?」

「迷子じゃないよ!皆が私からはぐれちゃったんだからね!!」

思わず出てしまった日本語。迷子になったのは自分の方じゃないかと、そんなこと全然思っただけでいいんだからね!!

「あら、お上手な日本語…」
「あつ…」

わざと片言になっただけなのにバレちゃうと、なんか余計に恥ずかしいよお…。



「私の名前は桂ヒナギク。…あなたのお名前を聞いても良いかしら?」

「アリス・カータレットと言います。イギリス人です」
「へー、アリスさんっていうのね」

とりあえず仕切り直して自己紹介。ヒナギクさんと名乗る彼女は、私がイギリス人だという事より「アリス」という名前である事の方に関心があるようでした。なんとなく嬉しそうに顔をしています。

「ん?どうかしたの?」
「ああゴメンね。私の家族にも同じ名前の子がいてね」
「へえー、そうなんだー!」

話を聞いてみると、ヒナギクさんは偶然私たちと同じコテージに向かう途中だったみたい。一人だったのは、急な用事が出来てしまったかららしく、コテージでは連れのご家族が先に行って待っているとの事。ケータイを持ってない私のために、ご家族に電話をしてもらって、私とはぐれたのに何故か先に着いているみんなと連絡をつけてくれました。シノに電話に出てもらおうと、シノは泣き崩れちゃって、私の事を心配してくれていたのが分かったのでちょっと反省。このままヒナギクさんと一緒に目的地へ向かう事になりました。

「…じゃあ行きましようか、アリスさん」

『アリス』でいいよ…私からは『ヒナ』って呼んでもいいかな？」

「ええ、構わないわよ」

「ありがとう、じゃあ行こうヒナ！」

いざ、シノたちの待つコテージへ出発！頑張って歩くよおっ！！

「え!?アリスって私と同年なの!!!見えなかったわ:」
「んもーう:ヒナまでそう言うのお?よく言われるけど:」
:」

山登りをしながら、お互いの事を聞き合っています。やっぱり私は高校生には見えてなかったみたい:しよぼん。

「ごめんなさい。でも凄いわね。お友達に会いに行くためにたった一人で飛行機に乗って来るだなんて:私にはとても出来ないわよ(主に飛行機に乗る事に対して尊敬しています)」

「ううん、そんな事無いよ。私は私のしたい事をやっただけだし、シノも日本も好きだから!それを言うならあの白皇で生徒会長をやってるヒナの方が凄いわよ!」

まだ少ししか話していないけれど、ヒナは凄い人だというのが分かっちゃうよ。日本人の美德である謙遜の態度に、立ち姿・歩き方とかもとてもスマートで:私の憧れる「やまとなでしこ」のイメージにぴったり!

「ヒナは『やまとなでしこ』だね!」

「えっ!? そうかしら?」

「うん! 物腰柔らかかで仕草とかもしゃつきりとしてて…私憧れちゃうよお〜!」

「それほどでも…アリスだって可愛らしくて素敵だと思うわよ。その…お人形さんみたいな感じで」

「それほどでもないよ〜」

照れ臭そうに言って来るヒナの顔はまたなんとなく嬉しそだったのが印象的でした。



「じゃあ、このあたりで少し休憩しましょうか?」

「うん、ちょうど疲れてきた所だったんだ〜!」

私の疲れを見抜いたかのようなタイミングでのヒナからの休憩の提案。他人の観察と気遣いも出来るだなんてやっぱりヒナは凄いや。私も負けないように、このあいだヨーコから教えてもらった「遠足でのおもてなし」をやっちゃうよお〜!

「ヒナ、バナナ食べる? 日本の遠足ではバナナはおやつ

に入らないから、みんなで食べられるようにたくさん持って来るんだよね!」

「それは初耳だけど…ありがた〜くいただくわ!」

「ちよつと待ってね。今リュックから出すから…」

私はバナナを出すために、リュックの一番上にある国語辞典を外に出しました。シノには持って行くのを反対されたけど、やっぱりこれは私の心のバイブルだから譲れないの!

「あれ!? アリス、それって…」

取り出した辞典に、ヒナがいち早く気付きました。やっぱり、おかし〜って思われちゃうのかな…。

「あ、コレ? 私のバイブル、国語辞典だよ。シノには持って行くなって言われたけど、コレがあるととっても落ち着くの!…みんなおかし〜って言うんだけど、私って変なのかなあ?」

「ううん、そんな事思わないわよ! だって…」

ヒナはそう言いながら自分のリュックの中を漁りだし

て…

「私も持つてるし…」

「えっ!？」

そこから私の辞典よりさらに分厚いものを取り出しました。一瞬、何が起きたのか良く分からなかったです。だけど、その事実を理解出来た時、日本に来てシノに出会えた時と同じくらいの嬉しさがこみ上げてきました!

「すごい!ヒナも持つてるんだね!!辞書を持って遠足に来る人にやっつとめぐり会えた!これって奇跡だよ!」

「そうねそうね!!こんなに便利なのに、みんななんて理解してくれないのか不思議で仕方なかったのよ!アリス最高!!」

握手をして抱き合う事で嬉しさを分かち合う私たち。日本人は嬉しい時に抱き合うのに慣れていない人が多いけど、ヒナにはそういった素振りは見られませんでした。むしろ、かなり慣れているような感じが…

「心の友よ〜!!」

二人一緒に飛び出した言葉、「心の友」。日本で大人気の猫型ロボットアニメで出てくるガキ大将がよく使う言葉だけど…私はこの言葉が大好き!自分のこだわりやポリシーを共有してくれる特別な存在に感じるから。

一人ぼっちの私を助けてくれたヒーローで、やまとなでしこで、心の友で…こんな素敵な人に出会えるだなんて、私はなんて幸せなんでしょう。



「ここみたいね。さあ着いたわよお〜!」

「やったー!ヒナありがとう!!」

ヒナと二人でコテージの敷地内に入ると、広場で二人の金髪の女の子が遊んでいるのが見えました。あれはカレンと…もう一人は私の知らない子みたいだね。二人は私たちの姿に気付くと嬉しそうにこちらに駆けて来ました。



「Hey! アリス! 無事に着いたデース!!」

「ごめんねカレン。みんなに心配かけちゃって…こちらのヒナギクさんのおかげだよ!」

「カレン、さつきお話ししたヒナです」

私がヒナの事を紹介しようとするのとそれより先に、カレンと手を繋いでいる私より小さい（ココ大事だよ）金髪の女の子が口を開きました。

「OH! ヒナ! 私は九条カレンと申しマース! ウチのアリスがご迷惑おかけしまシタ。Littleアリスとはついさつきお友達になりました。どーぞー夜露死苦デース!!」

「よろしく、カレンさん。桂ヒナギクです。こちらこそウチのアリスがお世話になって…」

やっぱり、この子がさつき言ってたアリスちゃんなんだね。ヒナは家族って言ってたけど、日本人には見えなし…私と同じホームステイかな?

「ヒナ、この子が…?」

「うん。『アリス』っていうの。ちょっと訳あってウチで

預かってる子なの。さつき言った『同じ名前の子』よ」

「そうなんだ、私と一緒にだね! 私もアリスっていうんだよ!」

「まあ素敵なお名前! 気高く、無垢で、至高の美しさを持つ究極の少女のお名前ですわね」

私が差し出した手をアリスちゃんは快く握り返してくれて嬉しそうに微笑み返してくれました。なんだかとても高貴な感じがする子だね。

「そんなに言われると照れちゃうよお〜! よろしくね!」

「ええ、こちらこそ!」

アリス同盟結成だね! 名前もそうだけど、昔の自分を見ているかのような親近感がわいてきてとっても嬉しいなあ〜! 私たちが手を握り合ってる所にヒナも加わってきて、まるで自分のお母さんに話しかけるように寄り添ってきました。

「そうそう聞いて! こちらのアリスさんも、旅に国語辞典を持ってきてるのよ! やっぱりあんなに便利な物なん

だから、持って来るのは常識だったのよ。ね、アリス♪」
「うん♪カレンも、散々私の事をへんだって言ってたよね。全然そんな事ないんだからねっ！」

ヒナ一緒にリュックの中の辞書を取り出して、二人に見せ付けます。

「……」

アリスちゃんとカレンは口を半開きにして私たちを見ています。きつと辞書の素晴らしさを分かってくれて……

「行きましょう、カレン。変人たちは……放っておいて。ハヤテの作った美味しいカレーが待ってますわよ」

「ガキ」

「イエース！ハヤテの Curry 楽しみデース!!おかしな二人も早く来てくだサーイ！」

「ガキ」

手を繋いで二人は行ってしまいました。私とヒナの間
に冷たい風が吹き抜けたような気がしました。……ダメダメ!
こんな事で落ち込んだじゃ……せっかく心の友に出会えた
んだから前向きに行かないと!!

「……ヒナ、私たち二人で頑張ろう!」

「そうね……私たちアウトローなのかもしれないわね。私
たちも行きましょう!」

「うん!ところで『ハヤテ』って人も、ヒナのご家族な
の?」

「え、それは……」

きつと私たちの他にもこの気持ちを分かってくれる人が
いるはず。そう信じて、ヒナから差し伸べられた手を
握ってシノたちの待つコテージへと向かうのでした。

【おわり】

贈り物？

著者：torbion

朝7時27分。少年は扉を静かに開けて、そつと寝室に忍び込んだ。まだ寝息を立てている彼女を起こさないよう、慎重に移動してカーテンを開けて明かりを取り入れる。

7時30分。少年はベッドに手をかけた。

「咲夜さん、朝ですよ。おはようございます！」

そう言つて、少年、綾崎ハヤテは手をおもいつきり振り上げた。そして、少女、咲夜とベッドの位置関係が逆になったのを見て、部屋から去つていった。

○●○

綾崎ハヤテは首を掴まれていた。

「さっきのは何や、ハヤテ！」

「いえ、朝なので起こしに行つただけですけ、ど」

「それやつたらなんでうちはベッドの下で目が覚めんねん！」

「くるしい、苦しいです、咲夜さん」

咲夜はチツ、と舌打ちをし、ハヤテの首から手を離した。ハヤテの首には手形が残つていた。

「それで、なんでベッドをひっくり返したんや」

「まあ、普通に起こしても良かったんですけど、それだつたらないと思つたので」

「なんで普通に起こさんねん！」

「だつて咲夜さん、面白いことを望んでいるんでしょう？」

「そんな売れへん芸人に対するドツキリみたいなもん、望んでないわ！」

どこから出したのか分からないハリセンでハヤテの頬をビンタした。ハヤテは綺麗な放物線を描き、壁にダイレクトしてくぼみを付ける。どうやらハヤテの体は壁よりも硬かつたようだ。

「それで、うちはまだあの言葉を聞いてないんやけど」

「えつと……。さっきのは面白かつたですか……？」

「謝罪の言葉や、アホー!!」

ハヤテは再び放物線を描いた。

○●○

「それで、なんで来たんや。ウチの誕生日は先週やつ

たで」

「はい。その誕生日のプレゼントの笑いを届けにきました」

ハヤテの返答を聞き、ハテナマークを浮かべた。

「は？ハヤテはウチの誕生日に来て、舞台上で盛大にやったやん」

「でも咲夜さん、微妙な顔をされていたでしょう」

「……見てたんか」

「ええ、ちゃんと見てました。だから、誕生日の笑いをプレゼントし直しに来ました」

「さっきのアレを見た後やから、面白さが減る気がするんやけど」

「大丈夫ですよ、ちゃんと考えてあります。期待しておいてください、師匠。ですがその前に水でも飲んでください。結構な長話になりましたから」

「お？おお」

ハヤテは水を差し出した。咲夜が水を受け取ったとき、スポンツと高い音がした。コップには右手がくっついたままだった。キヤーという、悲鳴が愛沢家に響いた。

「どうでしたか、咲夜さん」

「もう2、3発殴りたいわ。それと、ウチは笑うのは好きやけど、笑いの対象になるのは好きやない」

「えっと、どういう意味ですか」

「だから、笑いは見る側でええねん」

「そうですか。となると、今日のはダメだったということですね」

「まあ、そういうことになるな」

「分かりました。では、また考えてきますね」

ハヤテは咲夜の「ああ」という返事を聞き、三千院家に戻っていった。ハヤテの去った方向を見て、「期待してるで、ハヤテ」とつぶやいた。

次の日の朝、ベッドが折リたたまり、挟まれて目が覚めたとかどうか。

それはまるで魔法のよう

著者…タツキ

三千院家の広大な敷地内、その中でも三千院ナギが生活をしている母屋から2キロほど離れた場所にぼつりと一軒家が建っている。元々三千院家の庭には森が多いこともあってその開けた所に建っているという少し不自然さが残る形ではあったが、この家を初めて見る一組の男女はとても嬉しそうな表情を浮かべていた。

「今日からここが私たちの家…。それにしても一応予想はしてたけど、まさか結婚式をあげた当日に引越すことになるなんてね」

「まあ、たしかにびつくりですけど、でも…これですつと一緒にいられますね」

「…うん」

今すぐ家の中へ飛び込みたいという気持ちを押しさえながら綾崎ハヤテは鍵を回し、あえてゆっくりとドアを開け

た。そこでは小窓から差し込んでくる夕日が何の変哲もないはずの玄関を輝かせ、まだ使われていない空っぽの靴箱やほこり一つない廊下、その奥から感じられる静けさはあたかも自分たちを歓迎しているかのように感じられた。

思わず感動に浸っていたハヤテだったが、ふと今日から自分の妻になった人物が隣にいないことに気が付いた。自分が舞い上がっていたせいで彼女を置いてきてしまったとハヤテが顔を曇らせながら外へ出てみると、その彼女は玄関の前にぼーっとした表情でつつ立っていて、そしてそのままハヤテに気づきもせずずっとある一点を見つめていた。

「ヒナギクさん？」

「ふえ!? あ、ごめんね。なんかこれ見てたら、私がハヤテくんと結婚したんだって実感がわいてきて…。」

ヒナギクが見ていたのは表札。ドアの右側、ちょうどヒナギクの頭ぐらゐの高さにある薄い石造りの札に刻まれている二文字は彼女にとってはきつと新鮮なものなのだろう。ヒナギクがそっと手でなぞってみると石のひんや

りとした感触が指先をつんと刺激し、それを丸彫りのなめらかな肌触りが優しく包む。自分が、今隣にいるこの人にとって特別な存在なんだということを強く感じるこ
とができた。無意識のうちに顔をほころばせているヒナ
ギクにハヤテも自然と笑みがこぼれて、しかしそれでも
一緒に家の中に入りたいという気持ちの消えない彼は手
を差し出すとイタズラに彼女を呼んだ。

「荷物の整理もありますし、早く中に入りませんか？…
綾崎さん」

「もう…からかってるつもり？」

ハヤテの手を取ったヒナギクは少し頬を赤らめながら彼
に引かれるまま自分たちの新居の中へ入っていった。

『それはまるで魔法のよう』

「ふう、これで一通り終わりですかね」

新居に持ち込んだ最後の家具、リビング用のソファを移
動し終えたハヤテは汗をかいてこそいないがそれをぬぐ
うような仕草をする。

「お疲れ様。お茶、ここに置いてくわね」

「あ…ありがとうございます。それにしても意外と時間
かかっちゃいましたね」

「そうね。でも結構いい感じじゃない。あまり飾った感
じじゃないけど、こういう落ち着いてる感じのほうが私
は好きよ」

インテリアの配置はハヤテが一任していたのだが、ヒナ
ギクは最初から彼のセンスを否定するつもりはなかった
し、それ以前にハヤテはこういうことに関してはどうと
うしいほどに細かいので何も問題はなかった。現にさっ
き設置したソファをにらみつけながら顎に手を当て、ま
だなにやらブツブツとつぶやいている。

「やっぱりもうちよつと右のほうがこう…」

「ほらほら、そういうのは別に後でもいいじゃない。ご飯で来たんだから冷めないうちに食べましょ」

ヒナギクの台詞でハヤテは初めてキッチンから漂う香りに気が付いた。スパイシーでコクがあり、なおかつどこか甘いそれはさつきまで労働をしていた彼の空腹を容赦なく刺激し、お腹が鳴りそうになったハヤテは急いでそれを両手で押さえた。

(カレー…か。相変わらずだな……)

ヒナギクが妻として初めて作ってくれた料理の味に期待し、それを表すかのようにハヤテはニツコリと微笑んだ。

「そうですね。それじゃいただ…おわっ!!!」

「きやつ!!」

ふにつ……

「は、ハヤテ…くん？」

ハヤテはしばらく固まっていた。つまずいてこけた拍子にヒナギクも押し倒してしまっていた彼の手のひらには何やら柔らかい感触があり、それがなんなのか気が付いたときには既に力が入っていて、ヒナギクは突然の刺激に顔をしかめていた。

「んっ…!!」

「す、すいません!!ヒナギクさ…いたっ!!」

彼女から飛びのいたハヤテはゴツと鈍い音を立てて自分が置いたソファの角に頭をぶつけてしまった。後頭部を押さえて悶えているハヤテとは裏腹にヒナギクは考え事でもしているかのようにぼーっとしていて、そんな彼女をすごく怒っていると考えたハヤテは急いで頭を下げた。

「す、すいませんっヒナギクさん…!えっと、わざとじ

やなくて、その…つい、でもなくて…うつかり、じやなくて…えくと…だから…とにかく本当にすいませ…
…?」

ハヤテの右手はヒナギクの両手に包まれていた。彼女はうつむいてしまっていてハヤテからは表情が見えず、名前を呼ばれても答えなかったが、突然握っていたハヤテの手のひらを自分の…ヒナギク自身の胸に押し当てた。驚いたハヤテは手を離そうとしたがヒナギクはそれを許さず、刺激に体を震わせてギョツと目をつむりながらもハヤテの手を強く掴んでそのまま自分に密着させ続けた。

「ハヤテくん…」

ヒナギクは自分の胸をハヤテの手で押さえつけるのをやめようとしな。彼女に名前を呼ばれてからハヤテの手は力が抜けたように一切の抵抗も示さなくなった。

「今までの私のはじめては全部ハヤテくんだから…。人を好きになるのも、憧れるのも…キスするのも…。だからこれからの私のはじめても全部、全部ハヤテくんがい

い…。ハヤテくんじやなきやイヤ。以前、あなたは覚悟ができていないからって…そんなハヤテくんを私は待つてるって言ったけど、私たち、もう結婚したんだよ？本当は覚悟なんてとっくの昔にできてたんでしょ？だったら…」

顔を上げたヒナギクの顔は恥ずかしさが半分、寂しさが半分で、そんな彼女の表情にハヤテは言葉を発することができなかつた。

「だったらちゃんと…私のこと触ってよ…」

.....

たという気持ちだけは伝わっている気がした。

「夕飯…冷めちゃいましたね」

「ヒナギクさんのこと…ヒナってよんでもいいですか？」

「……………」

「ふえ!!??な、なによいきなり!!」

「ヒナギクさん？」

頑として振り向かなかったヒナギクもさすがにハヤテのほうに体を返し、そんな彼女にハヤテは自分の頭をポリポリとかきながらはにかんだ。

事後、ヒナギクはシーツの半分以上を占領して自らの身体を隠し、ハヤテに背を向けて悶絶していた。自分から誘ったという事実が後になって堪えたのだろうか。どうやっても顔をあげようとしなないヒナギクだったが、そんな彼女に微笑んだハヤテはベッドから足をおろしながらそつとヒナギクに話しかけた

「いや、ホント今更って感じなんですけど…さっきヒナギクさんが僕の名前を呼び捨てで呼んでるの聞いて、そういうえばって…」

「あの…一つお願いしてもいいですか？」

「ちよっ!!思い出させないでよ!!」

「な、なによ?」

「いたっ!や、やめてくださいよ!可愛かったじゃないですか!!」

恥ずかしさが消えたわけでもないし、現にお互い背をむけて顔を合わせてもいない。しかし、それでも嬉しかっ

「だからそういうことを言わないでく!!!」

ヒナギクの枕による攻撃から逃れるために急いでベッドから飛び降りて、目にもとまらぬ速さで服を着たハヤテは彼女が恥ずかしさでベッドから出てこられないことをいいことにドアの前でニッコリと微笑んでみせた。

「それじゃ、僕はご飯を温めなおしてきますから」

「あ、ちよつと待ちなさい!!」

「はは。ヒナギクさんはまだ立つのつらいでしょうし、ここまで持ってきてますから」

そう言ってハヤテがドアノブに手をかけた瞬間、彼は自分の服が引っ張られるのを感じた。

「待ってって、言ってるでしょ……」

「ヒナギクさん……っ!!」

柔らかく、甘い感触がハヤテの唇に触れる。シートこそ胸の前で持っているが、それを除くとまさに一糸まとわぬ姿のヒナギクは、まだ震えが残る足を精一杯伸ばして

ハヤテとの距離をゼロまで埋めた。ハヤテが状況を理解したときにはもう唇は離されていて、目の前には顔を真っ赤にそめながらも頬を膨らませている恋人が不機嫌そうに自分のことをにらみつけていた。

「えっと……。僕、何か……?」

「名前!!」

「はい?」

「だから……!!」

トスン……

言葉の勢いとは裏腹にヒナギクの足からはストンと力が抜け、そのままハヤテに寄り掛かる感じで彼の胸に顔をうずめた。

「ヒナってよんでくれるんじゃないの? ハヤテ……」

「……!!」

「もう…ハヤテはおっちょこちよいなんだから…」

ヒナギクが微笑んでいるだろうということは安易に想像がついた。ハヤテがそっと背に腕を回すとヒナギクもシートが落ちてしまうのも構わずに抱きしめ返してきた。彼女の体温が直に伝わり、彼女の甘酸っぱい匂いがすぐそばで香っている。それに酔いしれずにはいられないハヤテは片手をヒナギクの後頭部まで移し、頷くことで角度の変わったハヤテの顔は、結果的に彼女の髪にキスをするような形になった。

「それじゃ、ご飯を温めなおしてきますね。……ヒナ」

「うん。いってらっしゃい…」

ハヤテが部屋を出るのを見送った後、そのままの格好ではいられないヒナギクはまだ見慣れない衣装ダンスから寝巻きを取り出し、それに身を包むとベッドにストンと腰を下ろした。さっきの熱がまだ冷めていないからなのか、それとも真新しい新居に引き立てられるこれからの生活に対する期待からなのか、どちらにしる胸のドキド

キは収まらない彼女は無意識に自分のお腹に手を当てていた。気のせいと分かっている、温もりを感じずにはいられなかった。

「もう少しだけ二人っきりでいさせて欲しいってのは…ちよっと我が儘なのかな…」

ジレンマを通り越して矛盾。しかし、だからこそヒナギクは自分が呟いた言葉とは逆の意味の言葉を声に出さずにはいられなかった。

「あの娘にも…早く会いたいな……」

無彼夢中につき無我夢中なう

著者…きは

彼の寝顔を見るのは初めてだった。

雲一つない澄み切った青空が広がる五月の昼下がり。広大な白皇学院の敷地内にある湖のほとりで、彼は一際大きい樹木に背中を預けて寝息を立てていた。両手は木の根を撫でるように置かれ、両足はまっすぐに投げ出されている様子が、まるでお行儀よく座っているぬいぐるみを彷彿とさせた。

私はそろりそろりと忍び足で近づく。平静を装っていたが、心の内に秘めたかった動揺は簡単に行動へと波及して、そのせいで落ちている木枝を踏み割ってしまう。あまりの音の大きさに驚いて、両腕で抱えていた書類の束を落としそうになった。しかし彼は微動だにせず、目を覚ます心配すら見られない。安堵した私は彼の正面へと回り込み、その場でしゃがみ込んで彼の顔をまじまじと見つめることにした。

彼の寝顔を見るのは初めてだった。頬を突つきたくなるほどの穏やかな顔だった。女装が通用してしまうほどの女顔に無防備な状態も相まって、目の前にいる彼は

そんなじよそこらの女子よりも女子だった。もしかしたら、少年っぽいと親友から揶揄されている私に比べれば、今の彼の方が女子に見えるのかもしれない。

いつも見かけている彼は、わがままな主とちよつとめちやくちやなクラスメイトに囲まれているせいで、困り顔と作り笑顔を適宜使い分けている。そのように私の目には映っている。それは学校に限られたことであるかと思つたが、そうではなかった。

私は訳あつて彼が執事として勤めているアパートの住人となつてゐる。その生活の中でも彼はその表情を崩そうとしない。彼は私よりも早く起き、そして遅く寝ている。執事付きを売りとしてゐるアパートの、その執事として勤めている彼だからこそ、一住人である私と生活リズムが異なるのは致し方ないのかもしれないが――。

私は彼の顔を眺めながら、最近の生活について想いを馳せていた。顔にかかつてゐる枝葉の影が、爽やかな風に応答してゆらゆらと揺れている。彼の寝顔ならば、時間が経つのも忘れて、このままずっと傍に寄り添いながら見続けられる気がした。……時間？

——今、何時かしら？

私は腕時計に目をやる。長針は午後の授業が始まる十分前を指していた。

迂闊だった。移動の時間も考えれば、すぐにでも起こさなければならぬ。

「ハヤテくん、午後の授業が始まるわよ」

ベタな方法として、まずは声をかけてみる。だが、彼は一切反応しない。ならば肩でも揺さぶって起こしたほうが確実なのかもしれない。

——そうよ。そっちの方が良いに決まってるじゃない！

私は一つ深呼吸して気持ち落ち着かせてから彼を起こすことにした。書類の束を左脇に抱え、彼の肩に手を乗せる。あろうことか、対角線上の彼の左肩に。

しまった、と気づいた時には既に遅かった。身体のパラソスを崩した私は、勢い余って彼の胸に飛び込んでしまった。彼の口から僅かに呻き声が漏れる。肩を揺さぶるところの話ではない。慌てた私はとっさに彼から離れて様子を窺う。穏やかだった寝顔は、今では目に見えてはつきりと歪んでいた。そして、おもむろに彼の両目が開かれた。

「あれ……ここは……？」

かすれた声だった。うわ言のように呟くさまは、まさしく寝起きそのものと言ってよかった。

「ハヤテ君！起きてる!?もうすぐ午後の授業が始まるわ

よ！」

「午後……授業……？」

ダメだ。完全に寝ぼけている。

「ああ、もう！とにかく校舎に戻るわよ！ほら、掴まって！」

私は右手で彼の左手首を掴み、彼の意味とは関係なく立ち上がらせる。踏ん張りが利いてないのか、彼はよろめいた。そのことは見て見ぬふりだ。

それから私は彼を引っ張りながら、全力で駆け出した。時間も限られていたから、舗道ではなく森の中を突っ切っていくことにした。

「ふう、何とか間に合いそうね」

森を抜けて、校舎へと続く舗道へとたどり着いた。時間的余裕を得たことから、ここでひとまずあがった息を整える。

「スミマセン。た、助かりました。ヒナギクさん」

ゼーは——ゼーは——と、荒い呼吸を何度も繰り返しながら、ハヤテ君は礼を言った。やはり寝起きの全力疾走は身体に悪いらしい。表情は冴え始めていたが、顔色はどちらかといえば青白い。

「礼なんていいわよ。それよりも——」

続きを言いかけて、私は言葉を詰まらせた。私の右手はいつの間にか、しっかりと彼の左手を握っていた。半ば引きずられながら私に手引かれていた彼は、自然と私の手を握り返して一緒に走って来たことになる。そう考えると、とてつもなく恥ずかしくなった。

彼もそのことに気づいたようで、二人して顔を赤くしながら目を逸らす。

「そういえば、ヒナギクさんはどうしてあんな場所にいたのですか？」

「ふえっ？それは、生徒会室からの帰りで……」

私は脇に抱えていた書類の束を突きつける。生徒会で決裁を必要とするものだった。

「でも、生徒会室は校舎から真逆のところにありますよね？」

「ぐ、偶然よ！ たまたま通りかかったからに決まっているじゃない！」

私はくるりと振り返って、彼に背を向けるようにする。顔の赤みはまだまだ引きそうにない。

——心配したからに決まっているじゃない。

本音を舌の上で転がして、そのまま飲み込んだ。

午前最後の授業が終わった後だった。生徒会の決裁を

済ませようと校舎から出た時に、反対側の道をおぼつかない足取りで歩いている彼を見かけてしまったのだ。泥酔しきった姉に負けず劣らずのフラフラな動きと、教室ではそんな素振りすら見せなかったことによるギャップが私を不安にさせた。

気づけば彼の後を追いかけて、あの場所へとたどり着いていたのだ。案の定、彼は深い眠りに陥っていた。理由は考えるまでもないだろう。

「それよりも、貴方はもつと自分の身体を大切に——」

「——ヒナギクさん、ちよつといいですか？」

日常生活の無理が支障をきたしたのだと、説教の一つでもしようとして再度振り返った私であったが、一方の彼は真剣な面持ちで近づいてくる。彼の顔が近寄ってくるだけで、私の頬は最高潮に赤く染まっていた。ジンジンと痛みを感じるほどだ。……痛み？

「ここ、切れてますよ」

彼は私の左頬に水玉のハンカチを宛がった。おそらく、森を抜けている最中に好き放題伸びていた枝が掠ったのだろう。夢中で駆けていたから、今の今まで気づかなかったのだ。

「へ、平気よ！こんなの放っておけば勝手に治るから」

「でも、森の中でしたら何か菌でも入っているのかもし

れませんし……」

「大丈夫。こんな傷はいつものことだから」

「でも……」

彼はいつもの困り顔になっていた。まるで、飼い主から十分な愛情を受けられなかった小動物のような目をしていた。こうなったら、私が折れるしかなかった。

「……分かったわよ！保健室に行けばいいんですよ。行ってくるから、ハヤテ君は講義の先生にそのことを伝えといて」

「僕も一緒に行きますよ。……心配ですから」

ややためらいがちに言った彼の一言が、私の心臓を飛び上がらせた。バカみたい。私も素直に言えばよかった。

「じゃあ、一緒に行くわよ」

私が促して、彼と一緒に歩き出す。彼はいつもの笑顔に戻っていた。

彼からは見えないように、私は左頬のハンカチをしっかりと押さえた。傷口は思ったよりも深く、痛みと共に滲み出る血潮の熱を感じていた。

だが、それとは別の温かみをしっかりと指先で感じ取れることもできた。

——ああ、やっぱり私は彼のことが好きなんだ。

なんでもするよ!

著者…充電池

ゾウのような鼻に、ウシのような尻尾。爪はトラのように鋭く、クマのようながっしりとした肉体。明らかに怪しいそのブロンズ像を両手に、私は誰もいない放課後の生徒会室にやってきた。

「せっかくだから…いいよね? お仕事だし」

誰に話しかけるでもなく、生徒会長こそが座することを許されるその席に着いてみる。不気味なブロンズ像はひとまず机の上に置いて、鞆から大量の書類を取り出す。そう、この書類の山を処理することが、本日の私の——瀬川泉のミッション。さあやるぞとペンを握ると、ふと目の前に置いた不気味な銅像の視線が気になった。

「……こっそり生徒会室の片隅に放置しておいてもバレないかな」

そうは言ってもコレ、一応貰い物だから捨てちゃうわけ

にはいかない。そう考えているうちに時間だけが過ぎて、気づけば書類は手つかず。今日中にやっておくようにとヒナちゃんから言われているのに。

そんなピンチに駆けつけるように、エレベーターが動き出した。そして最上階——この場所に停まる。扉が開き、現れたのは我らが白皇学院の生徒会副会長。すぐに目と目が重なる。不釣り合いな席に着く私に、可愛くクスリと笑っていた。

「あら? ふふふ、こんにちは、瀬川生徒会長」

「えへへ、こんにちは愛歌さん」

笑って挨拶をする愛歌さんは、しばらく私の方を見た後、顔つきが変貌する。視線はやや下——例の不気味なブロンズ像へと向けられている。あまりに真剣な眼差しで見つめているため、私も黙って様子を伺う。もしかして呪いのヘンテコ像だとか言われたりしないかな……。やがて愛歌さんは、少し頬を緩ませ、再び私の顔を見た。

「この銅像は?」

「実はそれ、理沙ちゃんから貰ったんだあ」

「プレゼント、ということかしら?」

もしそうなら、私は理沙ちゃんの品格を疑うなあ。

「ううん。罰ゲームで」

「へえ……」

「またも黙り込む愛歌さん。その沈黙が、今の私には恐ろしい。」

「あの、愛歌さん？もしかしてコレ、何かとてつもなくオツカナイものだったり……する、の？」

「恐る恐る尋ねると、愛歌さんはさらに神妙な面持ちでじつと私を見る。綺麗でお淑やかなお姉さんという印象のある愛歌さんだけど、同時に謎の威圧感がある。おかげで愛歌さんを苦手とする人もいるけれど、もしかしたら私もそのうちの一人なのかもしれない。」

「これはね……この銅像はね、バクという生き物よ」

「ば、ばく……？」

「そう。人間の悪夢を食べると言われている伝説の生き物、それが獺（バク）よ」

「そ、そうなんだ……。でも、悪夢を食べてくれるのなら、良い子なんだよね？ね？」

「その通り。でもね、瀬川さんが手に入れたそのバク……バクの銅像は、少し特殊なのよ」

「……へ？」

「バクはバクでも呪いのバク。夢を『奪う』のが本来のバクなら、それは人に夢を『与える』バク」

「夢を与える？悪夢を見せるって……こと……かな……」

「そう。そしてその悪夢というのは、第三者の強い願望に基づいた悪夢になる。さらに悪夢は激しく人間の脳を刺激し、夢から覚めた後の現実にも、混乱させたり幻を見せたり、色々な影響を与えてしまうの。だから、この子の近くで迂闊に眠ってしまうのは非常に危険なのよ」

「え、えええ？つまり、どういふことなの？」

「そうねえ……仮に瀬川さんがその机に突っ伏して寝てしまっていたとしましょう。通りがかった私が瀬川さんの寝顔を見て、『この子を男の子にして私の彼氏にした』という強い願望を抱いてしまったら……」

「しまったら……？」

「極端な話、瀬川さんは男の子になる」

「ええ!？」

「そして私の彼氏となるのよ」

「ええ——ッ!？」

なんということでしょう。幸い自分はこの銅像の前で眠っていないから大惨事には至っていないけれど、そもそも自分の手の届く範囲に呪いのナントカという銅像が存在していることが耐えられない…。

「瀬川さん、あの、言いにくいんだけど実は……」

「えっ……まだ、なにか……」

「実は——今の話、ほとんど嘘なの」

「……………」

その言葉の意味をしばらく理解できなかった。

「……ビックリした？」

「な、なあんだあ。あー、もう、愛歌さああん！」

「うふふ、ごめんね。瀬川さん可愛いから、少しからかいたくなっちゃって」

「ふええ…嬉しくないよお」

肩の力が抜けて、思わずべたりと机に突っ伏す。また可愛い笑顔を見せる愛歌さんは、安物品を扱うようにヒョイとそのブロンズ像を手に取る。

「とはいえ良くない物に違いはないし……いっそのこと捨てちゃうとか？」

「えー、なんかそれ、大丈夫なのかなあ……」

「私は燃えるゴミだと思っわ」

「いやいやそうじゃなくて……」

「あ、じゃあ神社に奉納するとか。ほら、近くに朝風神社あるじゃない？」

「そもそも理沙ちゃんから貰ったものなんだけど……」

「今この場で木端微塵にしちゃうとか」

「ゴミに出すよりも酷いよ！」

(一応) 友達から貰ったものであり、不吉そうなものもある。ゴミに出したりするのは悪い気がするし、バチが当たりそうな気もする……。なんだかこれ、本当に困った物だ。理沙ちゃんには悪いけど、本つ当に厄介な物。

「それなら、私が引き取るわ」

「え？」

愛歌さんから出される最後の案に、思わず耳を疑った。
「そんな悪いよ」と断るも、愛歌さんは静かに首を横に振る。

「こういうものを専門で取り扱っている知り合いがいるから、その人に渡すだけよ。それに、タダで引き取ろうなんて思っていないわ」

「そっか！ うん！ 私、優しい愛歌さんのためなら、なんでもするよ！」

「……………」

「ん？」

「安心したわ。その言葉が聞けて……………」

そう言って黙り込む愛歌さん。その言葉の後に、何かを言いたそうにしている……………確証はないけれど、私にはそう思えた。愛歌さんは私に、何を伝えたいのだろうか？ 何か、話しぶらいこと？

「あつ、でもお金はそんなに持つてなくて……………」

「ううん。お金なんて必要ないわ。それよりも、欲しい物ができたの。最近ね」

「愛歌さんの……………欲しいもの？ なあに？」

なんだろう。愛歌さんほどの人なら、お金はもちろん、手に入れられないものなんて無いような気がする。そんな愛歌さんが欲しているものを、果たして私に用意できるのだろうか。愛歌さんはしばらく口を閉じたまま、“欲しいもの”が何なのか言わない。ただじっと、優しく儂げな眼差しで私だけを見ている。ような気がした。

「……………私の欲しいもの。それは、あなたよ」

「ああ、なるほど。私自身か……………はい？」

本日二度目の理解不能。ちよっと待つてほしい。言葉のとらえ方は色々あるけれど、真っ先に思い浮かぶのは虎鉄くんがハヤテくんを想うような気持ち。……………愛歌さんも？ いやいや、そんなそんな。生徒会副会長の愛歌さんに限ってそんな。さっきも冗談を言われたばかりだし、きつと次の言葉は「嘘でした、クスリ」となるに違いない。

「私は……瀬川さんが欲しいの。ダメ、かしら？」

ダメです。大事件です。声も表情も真剣なところがダメです。そして、だからこそ返答に困ってしまうわけで。

「あ、あの……だ、ダメっていうか……なんと言いますか……」

「きらい？」

「え、いえ！ 決してそのようなことではっ」

「好きか、きらいかと言うと？」

「そ、それは……す、す……」

「良かったあ。私もね、瀬川さんのこと、好きよ」

うーん。うーん……。あまりの急展開に頭がついていかなくて、気づけば愛歌さんのペースに乗せられている。

このお方と知恵比べをしても歯が立たないのは一目瞭然。私がすべきことは、包み隠さず、この気持ちを伝えること。そして、ハヤ太くんを追い回すのはやめるよう、虎鉄くんに言い聞かせておくこと。

「愛歌さん！」

「ん？」

「わ、私……愛歌さんのことはスキだけど、そういう特別な意味でのスキじゃないの！ だから……愛歌さんの気持ちには応えられないよ」

勇気を出して言った。途端に悲しそうな表情を見せる愛歌さんに胸を痛めつつも、私は正しいことをしたと、心の中で唱えた。思わせぶりの素振りを見せていたら、きっとさらに傷つけてしまうから。

「……そうよね。ごめんなさい」

「……………」

何も言えないでいると、再び愛歌さんが口を開く。

「ほら、私って一年留年していて、恥ずかしながらお友達と呼べる人が少ないの。なんとなく皆との距離も感じていたし、本当にお友達と呼べる人は、もしかしたらいないのかなって。だから、誰とでも仲良しで、周囲を明るくしてくれる瀬川さんが、私にとって特別な存在でいてくれたら嬉しいなって思っちゃって。わがままよね」

「愛歌さん……」

私はとんでもない思い違いをしていた。私はさつき、愛歌さんになんて言っただろう。

—— そういう特別な意味でのスキじゃないの！ ——

私は酷いことを言った。愛歌さんは不気味なブロンズ像を引き取ってまで、私と特別なお友達になろうとしていた。それなのに、私は……。

「今のは忘れて。私、帰るから」

「待って！」

ブロンズ像を片手に持った愛歌さんの背中を、咄嗟に呼び止めていた。

「私、愛歌さんとお友達になりたい！ その……私は愛歌さんが思うようなスゴイ人じゃないし……愛歌さんの言う“特別な存在”になれるか分からないけれど、こんな私でよければ……」

思ったことを上手く言葉にすることはできなかった。そ

れでも想いは通じたのか、愛歌さんの顔がすうっと明るくなる。

「瀬川さん……。ありがとう……。私、とても嬉しいわ」

「えへへ……」

改まって「友達になりましょう」なんて言ったの、いつぶりだろう。なんだか恥ずかしくて、お互いに笑い合う。なぜかこのタイミングで、ヒナちゃんに言いつけられていた書類に全く手を付けていないことを思い出したけれど、なんだかもういいやという気分になれた。

やがて愛歌さんは思い出したかのように鞆を開く。中からは細長いガラス瓶——ラムネが出てきた。

「これ、瀬川さんに」

「私に？ ありがとう！ うわあー、なんだか懐かしいなあラムネなんて。これどうしたの？」

「実はそのラムネ、実家で作っているものなの。あまり誰かにこういう話はしないから、いつもは一人で気分転換に飲むことが多いのだけど、今日は瀬川さんと一緒に飲みたくて」

「うわあ。なんか嬉しいな、こういうの」

「飲み終えたらその書類、なんとかしないとね」

「うっ……」

とある放課後の生徒会室。乾杯の音頭ののちに、カランと夏らしい鳴音が響いた。私は、愛歌さんとお友達になった。



あれから数日が経った今日、私は愛歌さんのお家に招待されていた。けれど天気は生憎の雨。しかも次第に強くなるとの予報。また今度にしようと考えもしたけれど、「遊びに行くね」と告げた時の愛歌さんの笑顔が脳裏に浮かんだ。そして気づけば私は律儀に雨の中、愛歌さんの家にやって来ていた。

「いらっしやい瀬川さん。こんな悪天候な日に遊びに来てくれるなんて嬉しいわ。濡れてない？」

「うん、大丈夫。家の前まで車で送ってもらえたし」

「そう。でも本当に嬉しいわ。今日は雷雨や強風の影響で停電・断水があるとか言われているみたいだし、来られないかと思ったわ」

「きよ、今日ってそんなに天気悪かったんだね……」

その後、愛歌さんの後ろについて部屋へ案内される。ナギちゃんの家に勝るとも劣らないお屋敷なのに、使用人の姿はほとんど目にしなかった。一人でウロウロしていたら迷子になっちゃうかなと考えながら、愛歌さんの部屋へと通される。部屋に入るとまず目に入ったのが、そのゴージャスな装飾とは不釣り合いなスーパールの袋だった。その視線を察してか、愛歌さんは笑顔で解説する。

「停電や断水となった状況を想定して、色々と自分で買そろえてみたの。あまり人に頼ってばかりも自分のためにならないと思って」

「へえー、偉いねえ。私なんかいつも執事の虎鉄くん任せっきりだよー、あはは。それで、どんなものを買ってきたの？」

膝をつき、ビニール袋を漁る愛歌さん。買ってきたもの

を張り切って見せようとする姿が、普段の愛歌さんと違い新鮮だった。

「まずはこれ、音楽CDよ」

「……え？」

『てんとう虫のサンバ』と表記されたCDを私に突きつける愛歌さん。今なんの話をしていたっけ？ どんな目的で行われた買い物なんだっけ？ 頭がフリーズして、思わず言葉を失う。

「今度、親戚のお姉さんの結婚式があるの。その披露宴の余興として、歌を歌うことになってね。失敗したくないから、こういう時にこそ練習しなきゃと思っ」

「そもそも停電したら、CD聴けないんじゃないかなー……」

「……」

「……スマホとかで聴けばいいんじゃないかな」

「それから非常食も買ってきたわ」

「……」

話を逸らされた！ っていうか愛歌さん、てんとう虫の

サンバ歌うんだ…なんだか想像できないや。

「見て。こういうの私、食べたことなくて。一度食べてみたいと思っていたの」

「……これ、カップうどん、だよな？」

「……もしかして私、何か間違えた？ 3分で出来るものだって聞いていたけど、これには5分って書いてあるし……薄々間違いだとは……」

「いやいやスピードの問題じゃなくて……。お湯はどうやって沸かすのかな……？」

「……」

「あ、いや！ でもカップうどんって美味しいもんね！ いざとなったらお湯無しでもきつと食べられるよ！ チキ○ラーメンだってそのまま食べても美味しいし！ うん、このうどんならきつとイけるイける！」

ツッコミだったりフオローだったりで忙しい。でも、誰にだって間違いはあるもの。私だってドジばかりな人生を送っているし、人のことをとやかく言う資格なんてない。

気を取り直し、「あとは何があるの？」と尋ねると、同じく気を取り直した愛歌さんが誇らしげに言う。

「基本中の基本。お水を買ってきたわ。良かったら一本どうかしら？」

「ほんと？ わーい。んー、ふはあ。そうそう、この昔から変わらない、夏にピッタリ爽やかな甘酸っぱさ！乳酸菌が体に染み渡る感じがして、なんだか健康的——
——ってカルピスだよコレ！」

「正解。瀬川さんも好きなのね。ほら見て、こんなにたくさん買ってきたわ」

「ぶう—— ツ！ げほっ！ げほっ！」

別の袋の中からごろごろと顔を出すカルピスの山……思わず吹き出してしまった。別にカルピスが嫌いなわけじゃないからいいんだけど、災害に備えるときに買うものとしてはちよつと違う気がする。

「ふ、普通のお水は？」

「買おうとしたのだけど、どうせ買うのなら、水は水でも味のついてるカルピスウォーターの方が良いと思つて」

「カルピスウォーターは水じゃないよ!？」

「そう言われてみればそうよね……。で、でも他に困る

ことがあるわけでもないし……」

「カップうどんは!？ たとえ電気が生きてても、お水が無かったら食べられないよ!？」

「カルピスうどんって……どうかしら?」

「ナイと思うなあ……」

「そうよね……」

ずーんと重くなる空気。私の目の前にいる愛歌さんは、皆が良く知る愛歌さんではない。夢じやないかと疑うくらいこのポンコツぶりに、思わず激しいツツコミを入れてしまう。

「ほ、他には無いの？ ほら、停電したら真っ暗だし、ライターとか懐中電灯とか、あかりになるもの!」

「あ! それならここに……どうぞ」

「おおー、これだよこれこれ! 色んなのがあって楽しいよねえ。使い方は分かる? ほら、こうやってぺきつと折れば中の液体が混ざって青い光が————ってサイリウムだよおおお!」

「違ったかしら?」

「割と違うかな! 普通は懐中電灯だよ! 百歩譲ってサイリウムで良いとしても、緑とかオレンジとか明るい

色にしようよお！」

ついつい大声を出してしまい、愛歌さんはしゅんと肩をすくめる。どうやら愛歌さんが購入してきたものは以上。使用人に頼らず自分の力で試みた初陣は、評するならば圧倒的敗北。ずーんと落ち込む愛歌さんに、何て声をかけたら良いか分からない……。とにかく何でもいからフオローを入れようと考えたその瞬間、狙いをすましたかのように目の前が真っ暗になる。

「あら？」

「うそ!? 本当に停電!? 愛歌さん大丈夫——ひえあ!?」

青い光が浮かび上がり、愛歌さんの顔だけをぼうつと照らし出していた。すぐにそれがサイリウムだと分かったけれど、なんだか生首を見てしまった気分で心臓が悪い。それから愛歌さんは使用人と連絡をとり、状況確認をしていた。こうやって落ち着いて物事に対処する辺りはいつもの愛歌さんだ。

「——思った通り、停電に加えて断水もしている

みたいね」

「ええっ!? だ、大丈夫なの？」

「平気よ。すぐに復旧するみたいだから」

「そ、そっかあ……。でも復旧までの間は、この装備で乗り切るしかないね……」

使えない音楽CD。食べられないカップうどん。淡い光のサイリウム。そしてカルピスウォーター。このラインナップだと、カルピスが至極まともなものに思えてしまう。

「ええ、そうね……」

急に静かになる。聴こえてくるのは豪雨と風の音。頼りない光では愛歌さんの表情はよく分からない。ただ何となく、自分も感じていることを、愛歌さんも感じているんじゃないかと考えていた。

「もしかして愛歌さん……怖いのか？」

「……そうね。とても不安で、怖いわ」

「愛歌さん……」

「せめて歌詞だけでも覚えておかないと不安で……」

「そつちイ!？」

思わずツツコミを入れると、愛歌さんがクスリと笑う。今日は本当に、この人に振り回されてばかりだ。

「ふふっ……なんだか嬉しい」

「え？」

「学校の私とは印象違うでしょ？」

「え……あ、うん」

「これが本当の私。ありのままの私。そんな私に、遠慮なくツツコミを入れてくれるお友達がいるってことが……嬉しいの。やっぱり瀬川さんは、私にとって、特別な存在になり得る人だわ」

特別な存在……ただのお友達ではなく、特別な存在。あの日も愛歌さんからその言葉を聞いた。ただ仲が良いっていうだけじゃなくて、なんとというか家族みたいなの……そんな密接な間柄を想像した。その想像が正しいのかイマイチ良く分からないけれど、愛歌さんは私の事を“特別な存在”だと呼んでくれている。たとえ暗闇の中でも、真正面から告げられるその言葉は嬉しくて、照れくさくもあつた。

「えへへ……あつ、えーと、すごい雨だねえ。外どうなってるんだろー」

恥ずかしさを紛らわそうと立ち上がり、締め切ったカーテンに手を取る。たとえ大雨でも日中だ。カーテンを開ければ少しは部屋も明るくなるだろう。そう思ってカーテンを開けた瞬間、眩い光が瞳を刺激する。同時に鳴り響いた雷鳴が、お腹の底まで響き渡った。

「うわあ!」

「瀬川さん!」

——。パキン。

突然のことによるめき、派手に尻もちをついた。それと同時に、何か固いものが割れる音。やがて全身の毛が逆立つような感覚と、じんわりと濡れてくるお尻。

「あ、愛歌さん……」

「はい」

「今の音って……」

「とりあえず、立ち上がってみて」

「う、うん……」

言われた通り起き上がると、愛歌さんは何とも微妙な表情で私のお尻を見つめていた。

「大変よ瀬川さん」

「な、なにが……」

「瀬川さんのお尻が光っている……輝いているわ。瀬川さんのお尻！」

「ええ!?! ん? な、あ、ええ!?!」

自分で確認できない分、愛歌さんが何を言っているのか分からなかった。

「と思ったら、サイリウムの中の液体が付着しているだけね。ふう…瀬川さんが真つ暗な状況で未知なる能力を発現させたのかと思って、少し興奮してしまっただわ」

「いやいや意味わかんないよ! っていうかコレ大丈夫なの!?! その液体って、何か危険だったりするやつじゃないの!?!」

「さあ……そこまでは私も」

「取扱説明書みたいなのは無いの!?!」

「あ、それならあるわ」

「なんて書いてある?」

「暗くて読めない……」

「か、懐中電灯……は無いから、今こそ他のサイリウムを折って……っ!」

「ごめんなさい。瀬川さんのお尻で最後なの」

「ええッ!?!」

「瀬川さんのお尻が……私たちの最後の希望なの……」

「そーゆーのいいからッ!」

「とはいえ無いものはどうしようもないわね……。瀬川さん、何とかしてもう少し強く光れないかしら?」

「無茶言わないでよオ!」

液体の感触は、服だけでなく皮膚にも伝わっているような気がする。もし毒性のあるものなら、処置は早いに越したことはない。この状況の打開策は? 必死に思考を巡らせて、ひとつのシンプルな結論を導き出した。

「そうだ! 洗い流せばいいんだ!」

「分かったわ。じゃあ私はバケツにお水を汲んでくるから、瀬川さんは服を脱いで待っていて」

「う、うん！」

この際、羞恥心は払拭しよう。とにかく自分の身が大切。愛歌さんが暗闇の中どこかへ走っていく音を聞いてから、私はスカートをおろす。困ったことに、下着まで光っているのが見えてウンザリした。

「お待たせ瀬川さん」

「愛歌さん！ 暗いから足元には気を付けて！」

「ええ、大丈夫よ。瀬川さんの命はこの私が命に代えても守——」

「わーッ！ 言ってるそばから————ッ！」

その瞬間、暗くて何が起きたのか正直よく分からなかった。ただ分かるのは、お尻どころか頭から足先まで、どつぷりと水をかぶったこと。私も愛歌さんも何も言わず、ポタポタと水の滴る音だけが部屋に響く。

「せ、瀬川さん……」

「……」

「いっ、ごめんなさい……私……」

「……………」

「私……瀬川さんが家に来るって話になった時から浮かれていて……今日もずっと空回りばかりで……。瀬川さんは私にとって大切な人なのに……。私、迷惑かけてばかりで……」

ポタポタと、私の髪から滴り落ちる水の音。外で吹き荒れる雨の音。そして私の目の前、濡れていないはずの愛歌さんからも、ポタポタと。

「愛歌さん」

「……」

「怪我はない？」

「え？ 私は大丈夫だけど……。怒らないの？」

「えへへ、怒らないよ。だって、私のために色々してくれてるっていう愛歌さん気持ち、ちゃんと伝わるもん。たとえ空回りしてたって、怒れるわけないよ」

「瀬川さん……」

「それに、結果的に綺麗に洗い流せたみたいだし、万事OK！ ありがとう、愛歌さん」

「瀬川さん……こちらこそ、本当にありがとう……」

この程度のこととで、私と愛歌さんの友情は崩れたりしない。そんな私たちを祝福するかのように、部屋の照明がつく。同時に愛歌さんのスマホが鳴る。どうやらたった今、電気と水道が復旧したとのこと。

「いやあ、色々あったけどなんとか復旧して良かったね。電気もお水も——」

——あれ？ お水も？

違和感がしてふっと愛歌さんの方を見ると、笑顔が引きつっていた。まさかと思ひ濡れた自分の体を鏡に映す。そこには、ベタベタした白い液体を頭からかぶった半笑いの自分が立っていた。

◇ ◇ ◇

「わあ、瀬川さん。すごく似合ってるわ」

「あ、ありがとう——」

シャワー室から戻った私を、愛歌さんは大喜びで迎え入れてくれていた。私はというと、なんだか複雑な気持ちだった。

「——ってなんなのこの服——」

「犬よ」

「いや分かってるよ！ 私が聞いているのは、どうしてわざわざこんな服を選んだのって！」

「可愛いと思って」

「はは……」

反論する気も失せるほどの、清々しい笑顔。濡れてしまった私の服を洗濯に出し、シャワーを浴びている間に愛歌さんが用意してくれたこの服……。あざとさ満点の犬耳フードパジャマ。たとえ相手が愛歌さんであっても、この姿を見られるのは恥ずかしい。

「瀬川さんは、イヌとネコだどっちが好みなの？」

「え？ うん……どっちも好きだけど、強いて言うならワンちゃんかなあ。私、天気の良い日にお散歩したりす

るの好きだし、可愛いワンちゃんとお散歩できたら素敵だなぁって。愛歌さんは？」

「私もイヌ派ねえ。飼い主に忠実で、それでいて遠慮のないところが特に好き。瀬川さんみたいに」

そう言いつつ、愛歌さんは両手でペタペタと私の頭を撫でる。シャワーを浴びた後の急なスキンシップにびっくりして、少し恥ずかしくなる。

「わ、私は人間だよお！」

「ふふふ、ごめんなさい。その姿の瀬川さんを見ていたら、つい飼っていた犬のことを思い出しちゃって」

「え、愛歌さん犬飼ってたの？——あつ」

ナチュラルにそう聞き返してしまった後に気がつく。飼っているのではなく、飼っていた、ということに。はっとする私の表情に気づき、愛歌さんは「気にしないで」と首を横に振る。それでも、少し寂しそうだった。

「本当について最近だったわ。あの子は交通事故で亡くなったの。私が学校へ行っている間の出来事で、帰った時にはもう、あの子はいなくなっていたわ」

「そう……だったんだ……」

「実はそれでここ最近、ずっと無気力な毎日を送っていたのだけれど……でも、瀬川さんに出会えた」

「え？」

「あの時、勇気を出して瀬川さんに心の内を告白して……瀬川さんは私の気持ちに向き合ってくれた。今日だってこんな天気の日にも関わらず来てくれて、一緒にいてくれた。あの子のことを忘れたいわげじゃないけれど、ずっと立ち止まっていた私の背中を、瀬川さんが前へ押し出してくれたような気がして……本当に嬉しいの」

愛歌さんにとっての特別な存在……かっつてのそれは、交通事故で天国に行った、愛歌さんの愛犬なのだろう。それを失った愛歌さんに手を差し伸べたのが私であると、つまりそういうことだ。私自身はそんな大層なことをしたつもりはないけれど、結果的にそうなって、愛歌さんが喜んでくれた。それは私にとっても嬉しいことだった。

「えへへ……なんだか照れちゃうな。愛歌さんの飼ってたワンちゃんってどんな子だったの？」

「そうねえ……さっきも言った通り、瀬川さんにそっくりだったわ」

「私に？　へえ、ちなみに名前は？」

「ポチよ」

「……へえ」

「他とは違う珍しい名前にしたくて、私が名付けたの」

いやいやいや！　すごくフツーな名前です！　とは迂闊に言えない。なにしろ愛歌さんが世間離れしていることは、今日までの出来事で明白。相当可愛がっていたワンちゃんを普通呼ばわりしてしまったら、愛歌さんを傷つけてしまうかもしれない。

「か…可愛い名前だね！」

「ふふふ、ありがとう」

素でこの名前に決めたみたいだ。セーフ。

「私とそっくりって、どんな所がそっくりだったの？」

「うーん…あつ、アルバムがあるからよかったら見てみない？」

「うん！　見る見る！」

見る？というよりも、見せたい！という気持ちが伝わる

声色だった。私の了承を確認した愛歌さんはさっと立ち上がり、部屋の奥から分厚いアルバムを取り出す。アルバムがひとつ床に置かれ、二冊目が積まれ、その上に三冊目、さらに四冊目そして――

「ちよ、ちよっとストップ愛歌さん！」

「ん？」

「あ、アルバムは全部で何冊あるのかな…？？」

その質問に、愛歌さんはニッコリと笑うだけで何も答えがない。私はとりあえず三冊で良いと答えた。

一冊目を開くと、愛歌さんとポチの大きなツーショット写真が目に入った。

「小さい頃の私。で、この子がポチ」

「ポチって大型犬だったんだ…」

その名前からイメージしていたのは、小さな柴犬。しかし実際にその写真に写っていたのは幼い愛歌さんを背中に乗せてしまいそうな、勇ましい表情のボルゾイだった。さらにページをめくる。その次のページをめくっても、めくってもめくっても、映っているのは愛歌さんとポチ。

もしくは愛歌さんが撮影したポチ。愛歌さんがかなりの愛犬家だったことが、写真に写る愛歌さんの成長具合から伺える。

「ポチはね、この赤い首輪がお気に入りだったの。古くなったから別のに交換しようとしても嫌がっちゃって」

「へえ、何か思い入れでもあったのかな？」

「私は覚えてないのだけど、幼い頃の私がポチにプレゼントしたものでいいわ」

「すごい！ポチはその時のことをずっと覚えていて、大事にしてくれてたんだあ！」

愛歌さんとポチは、それだけ長く、深い付き合いだったんだ。そう思うと、心の内側が温かくなる。

それから愛歌さんの解説つきでページをめくっていると、写真のポチに、吹き出しが付け加えられているのを見つけた。

「ちょうど中等部上がった頃かしら？ポチの気持ちを代筆するのがマイブームだったの」

「あー、やるやる。私も旅行で撮った写真とかに吹き出し入れたりするよ」

プールに飛び込んだポチが「気持ち良いー」と言っていたり、日向ぼっこをするポチが「眠い……」と言っていたり、セリフ自体はシンプルでも、ポチを愛する気持ちはひしひしと伝わる。その愛を感じながらページをめくると、ある言葉に思わずクスリと笑ってしまった。

「瀬川さん？」

「ごめんごめん。ポチって、愛歌さんのことを『愛歌さま』って呼ぶんだね」

手を広げてポチを呼ぶ愛歌さんの写真。ポチは遠いところから全速力で走り、「愛歌さま、今行きます！」と言っている。

「ふふっ、そうよ。今だから言えるけど、幼い頃の私は自分のことをお姫さまとか女王さまだと思いついて、だから当然ポチは私のことを『愛歌さま』と呼んでいるんだって……そんな認識のまま育ったのよ」

「ははは、それでその呼び方なんだね」

「ええ。ああでも、だからと言って物凄く従順っていうわけじゃなかったの」

「吠えたりするの？」

「吠えはしないんだけど、たまに脱走するのよ」

「脱走!？」

「それも一度や二度じゃないくらいヤンチャだったの」

「そんなにしょっちゅう逃げ出してたんだ…」

「もちろん外に出て誰かに危害を加えたりしたら大変だから鎖に繋いでおくこともあったのだけど、それでも逃げ出していつちやって」

「え!?! どうやって逃げ出したの？」

「鎖は頑丈だったのだけど、その鎖を繋いだ杭の周りを掘って、杭ごと引っこ抜いちやったりしたこともあったわ」

「なんという執念……結局どこへ行っちゃってたの？」

「お屋敷の中」

「え？」

「今思えば、遊んで欲しかったのかもしれないわね。ポチは脱走すると、決まって私の部屋の付近にかくれて、私に見つけてもらうのを待っていたのよ」

「ええー、なにそれ可愛い!」

「でも当時はそんな風に思っていなかったから、脱走に對してオシオキもしていたわ」

「えっ……ど、どんな？」

「私の気が済むまで、お散歩に付き合ってもらおうとか」

「くすっ……それは、ポチも本望だったろうねえ」

それから、愛歌さんはアルバムのページをめくりながらポチの思い出話をしてくれた。写真の一枚一枚に深い思い出があり、私にもその楽しかった日々が伝わる。写真は無数に存在していて、めくるたびに楽しい思い出が流れる。そして、同時に同じ分だけの悲しみが募る。昔を懐かしむ愛歌さんの儂げな表情を、何とかしてあげたいと思った。

「それからね、これは……」

「愛歌さん——」

言葉を遮られた愛歌さんは、無言のまま私を見た。

「——私、頑張るから! えっと……愛歌さんのために何をしてあげられるか、自分じゃよく分からないけれど……でも! せっかく私たち友達になれたんだし、友達のために何かしてあげたい! だから……その、悲しい時や寂しい時は、無理しないで私に言って欲しいな。私……愛歌さんのためなら、なんでもするよ!」

私はこの気持ちを、うまく愛歌さんに伝えられただろうか。言葉足らずではあったけれど、私の本心だった。愛歌さんの役に立ちたいという、私の素直な気持ち。

「……………」

「ん？」

愛歌さんはしばらく黙っていたけれど、何か言いたそうな表情をしていた。思いとどめずに言って欲しい、そんな眼差しを送り続けていると、やがて愛歌さんの口が開いた。

「安心したわ。その言葉が聞けて……………」

ポチのアルバムから視線を外し、愛歌さんはまっすぐに私を見つめていた。

「……………」今の私には、たったひとつの願いがあるわ。誰かの協力で簡単に叶うことだけれど……………相手がいくら

友達でも、いくら親友でも、いくら家族でも……………それは私の、ワガママ。私はそんなワガママを頼んだり、強要したりするほど凶々しい人間でもない……………」

「……………」

「でも、瀬川さんからそう言ってもらえて……………私も少しはワガママ、言ってもいいんだって気になれたわ」

私から視線を外さず、淡々と話し続ける愛歌さん。真面目な話をしているのだということは伝わるけれど、正直何が言いたいのか、抽象的すぎてよく分からなかった。やっぱり頭のいい人なんだなという気持ちで、私も愛歌さんの目を見る。

「……………えっと、愛歌さんのワガママって？ 私はどうすればいいの？」

そう尋ねると、真顔だった愛歌さんが再びニッコリと笑う。その右手はゆっくりと私の頭上に置かれ、優しく髪を撫でた。

「ありがとう。でもいいの。瀬川さんがこうして、ポチになっってくれただけで」

もう一度私の着ている犬耳パジャマを見直してみる。白い生地に茶色の模様。それはまるで、愛歌さんが飼っていたボルゾイ……ポチにそっくりだった。そっか、愛歌さんのワガママというのはこれだったんだ。心の中でそう納得し、私も自然と笑顔になった。

「えへへ、なんだかまた愛歌さんとの距離が縮まった感じがするね」

「そうね。あつ、そうだ。それじゃ、その記念に一杯、どうかしら？」

そう言って愛歌さんが取り出したのは、見覚えのある長い細いガラス瓶。それはあの日、私たちが友達になった日に一緒に飲んだラムネだった。私と愛歌さんにとってそれはただのラムネではなく、友情の証。ラムネを飲み交わすたびに、私たちの仲は深まっていくのだ。

——
あれ？

夏なのに、少し寒い。暗くて周囲が見渡せない。上半身を起こすと、頭がガンガンする。

——
いつ横になったっけ？

直前まで自分が何をしていたのか思い出せなかった。頭がガンガンして、ぼんやりして、何も考えられない。頭がかゆくて掻こうとするけれど、腕がうまく動かない。代わりにジャラリと金属の音がした。その音が頭に響いて、少しだけ意識がハッキリする。暗闇に目が慣れて、周囲が見渡せるようになる。手足に感覚が戻り、違和感を覚え始める……。

「なに……これ……」

明かりの無いこの部屋は、部屋というよりも地下牢という表現が似合っていた。両手と両足は手錠のようなもので拘束されていて、肩幅までしか開けない。この異常な



状態を、私は「なにこれ？」としか考えられなかった。何回も、何十回も、何百回も、ただひたすら「なにこれ？」を繰り返して、ようやく動き出そうという思考に至った。

「……ッ！」

しかし立ち上がろうとした瞬間に、首が締め付けられるのを感じた。再び座り込んでから首元に手をやると、何が首に巻いてある……。その“何か”には鎖がついていて、辿っていくと床に固定されているのが分かった。自分の首に巻かれている物が何なのか、目視することはできない。ただ私は、ぼんやりした記憶と直感で、「これは赤い首輪なのではないだろうか」と思った。そう考えを巡らす間、私は呼吸するのを忘れていた。

「——愛歌さん。……どうして」

私の口から咄嗟に出た名前。そして、さっきまで自分が何をしてしていたのか、全てを思い出した。すべてを思い出したからこそ、目の前に笑顔で現れたこの人に、私は恐怖した。

「ポチ。あなたが望んだことでしょうか？」

「……ポチ？　ち、違うよ愛歌さん……。ポチはもう……。いないんだよ」

「うふふ、いるじゃない、私の目の前に。私の可愛いポチ」

そうしてまた、あの時のように優しく、私の髪を撫でる。しっかりと私の目を見ている。見下ろしている。愛歌さんは間違いなく、私のことをポチと呼んでいる。なぜ？　そう問いかけても、愛歌さんから明確な返答はない。ただひとつ帰ってきたのは、「あなたが望んだこと」という旨の言葉。わたしが愛歌さんの犬になることを望んだ？　ポチになることを、望んだ？　あり得ない。自分のことだから分かる。あり得ない。なら本当になぜなのか。私は、愛歌さんのために体を張って、そんなことをするなんて——

私、愛歌さんのためなら……

ふとした瞬間に、その言葉の続きが脳裏をよぎった。たったこの一言が、愛歌さんをそうさせたの？

「ポチ、今日は何をして遊びましょうか。かけっこ？ それともボール遊びがいいかしら？ ゆっくりお昼寝もいいわね。ふふっ」

「違う……違うよ……私、そんなつもりで言ったんじゃない……」

私の言葉は届かず、愛歌さんは次々に語りかける。きつとどれも、愛犬のポチと過ごした思い出の一ページなんだ。愛歌さんはそれを、私をポチに置き換えて蘇らせようとしている。

ただ愛歌さんの語りかけを聞くしかなかった私。しかし、自分の意思とは反対に、気の抜けた音がお腹から響いた。思えば既にお昼を過ぎている。愛歌さんが用意したカップうどんは結局食べることなく、きつと今でも部屋に転がっているだろう。こんなことなら、せめてカルピスをもっと飲んでおけば良かった。……なんて、少し前の楽しかった時間を思い起こして、辛くなった。

「あら、そういうえばゴハンがまだだったわ。ごめんねポ

チ、すぐに用意してくるから、良い子にして待っているのよ」

優しくそう言い聞かせるように頭を撫で、愛歌さんはその場からいなくなる。その姿が完全に見えなくなるのを見届けてから、私は真っ先に『どうやって逃げ出すか』を考えていた。目覚めてすぐの時は気が動転してしまっていたが、あの時よりは冷静だ。

「手錠は鍵がないとダメ……かあ」

肩幅程度のチェーンが伸びた手足の手錠は、私の動きを大きく制限する。これさえ無ければ素早く動けそうな気がするけれど、すぐに外すのは難しい。それじゃあこの首輪は？ そう思って、首に手を置く。分厚い革製の首輪だけれど、キツくて微動だにしない上に、目視できずその構造も分からない。とどのつまり、首輪も外せないということになる。首輪で繋がれている限り、私はここから動くことができない……これが人に飼われた犬の気持ちなのだろうか？ ポチもそうだったのだろうか——
—そう思い始めた瞬間、あることを思い出した。

「ポチは……どうやって脱走したって言ったっけ？」

愛歌さんの愛犬ポチは、何度も何度も逃げ出していた。その方法はたしか――。

鎖の繋がれた先を見る。どうやら地面から一本の木製杭が出ていて、鎖は杭に開けられた穴を通すようにして固定されているようだ。突破口はこれしかない――思うよりも先に体が動き出す。鎖を手に取り、力いっぱい引っ張る。やがて杭がミシミシと音を立てはじめると、トドメの一撃にと両足を揃え、倒れながら杭に蹴りを入れる。転倒した拍子に肩を痛めたけれど、杭は根元辺りで折れていた。鎖と折れた杭の破片を引き摺ることになるけれど、これで自由に行動できる。

“待て”ができなかったのかしら。いけない子ね、ポチ
「あつ……」

ようやく逃げ出せると希望を持った瞬間、目の前に愛歌さんが現れた。その手には、ドッグフードをこんもりと盛ったお皿がある。目の前で笑うこの人は、本気で私を犬として見ていて、このドッグフードを食べさせようとしていた……。その不気味さに、心臓が押し潰される感

覚を覚えた。

「いやあああつ！」

恐怖のあまり大声を張り上げ、繋がれた両手で愛歌さん突き飛ばした。知略や地の利で劣っていても、体力や腕力であれば少なからずこちらの方が有利。愛歌さんは簡単によるめき、壁に打ち付けられて膝をつく。手に持っていたお皿は投げ出され、ドッグフードは四方八方に散っていく。あまりに弱々しく、寂しげに座り込む愛歌さんを、私は「可哀想だ」と思ってしまった。自分をここまで陥れた相手に対して情けをかけたいと、そう思って足を止めてしまっていた。愛歌さんは、ポチを失って悲しいんだ。だからこんな、気の迷いを起こしているだけ……。そうであつて欲しい。

「愛歌さん……」

「……………」

「嘘なんだよね？ これ、きっとドッキリで、実は別室で理沙ちゃんや美希ちゃんが見ている、笑ってるとか……
そういうのだよね？」

「……………」

「もうやめようよ。また冗談って言ってよ……」

「……………」

「ねえお願い……お願いだから……愛歌さん……」

沈黙を貫く愛歌さんの口角が、少し上がるのが見えた。その微妙な動きの裏にどんな意図があるかは分からない。ただ私は、「嘘だと言って」と願いつづけた。たとえ本気だったとしても、考え直してほしい。嘘だということにしてほしい。

「違うわ」

「……え？　違うって、何が……愛歌さん……」

「愛歌さん、じゃなくて……“愛歌さま”でしょう？」

絶望という感情が、喉からストンと胃に落ちる感覚。辛い気持ちを抑え、私は走った。平和的には終われない。逃げるしかない、逃げるしかない。後ろは振り返らず、地下牢から階上へ手足を使い這うように駆け上がる。上り切ったと同時に、足に繋がれた手錠でもつれ、前方に転ぶ。

「いや……止まっちゃダメ……」

走ろう。そう思っても、手足に繋がれた手錠のせいで走れない。それでも速く進む必要がある……そう考えた結果、無意識に手足を使って——四本足で走っていた。愛歌さんから借りたままの犬耳パジャマ。首には赤い首輪を巻き、鎖を引き摺る。これではまるで、本当に犬ではないか……逃げまといながらそう考えてしまい、悲しくなつて涙が出た。

四本足のまま、私は歪んで見える廊下を走る。ここがお屋敷の中の、どの辺りなのか見当もつかない。まずはどこかに隠れて冷静になる……それからどう脱出するか考えよう。走りながらそう結論を出し、無数にある部屋の扉をランダムに選び、躊躇なく飛び込んだ。

「え……何……ここ……」

私が飛び込んだその部屋は皮肉にも、犬が遊んだり休んだりするための設備が整った——言わば犬部屋のような部屋だった。しかしそんな不気味な場所であっても、引き返している余裕はない。部屋の隅に置かれたクローゼットを開き、その中に体を納める。

「……お願い………来ないで………」

だんだんと近づく足音。ボタンボタンと、扉の開閉音が遠くから響く。愛歌さんは部屋をひとつひとつ調べ始めている。鎖を引き摺る音がしなくなったから、どこかへ隠れたのだと見当をつけた…？ 私がそのことに気づいたときには、既に犬部屋の扉が開かれていた。必死に息を殺し、バクバクと鳴り響く心臓の鼓動を聞く。

「ふふふ………」

「………」

突然笑い出す愛歌さんが、不気味だった。

「また……かくれんぼがしたいのね？」

かくれんぼ……。

「私に見つけてほしいのね」

あの時、アルバムを見ながら愛歌さんは言っていた。ポ

チは脱走したあと、お屋敷の中へ隠れる。かくれんぼをすると、必ず愛歌さんに見つかる。まるで見つけてもらうのを待っていたかのように、ポチは愛歌さんに見つかってしまふ。

「すぐに見つけてあげるわ、ポチ」

そして見つかったポチは、愛歌さんのオシオキを受ける。愛歌さんの気が済むまで、ポチはお散歩に付き合うのだ。

「ここにいるのね、ポチ——」

クローゼットの扉の向こう側に、愛歌さんの気配を感じた。もうダメだ。ここまで必死に頑張ったけれど、ポチは今回も愛歌さんに見つかってしまったのだ。きっとこの先、何度逃走しても結果は同じだろう。嗚呼……私はこれから、ポチとしてどんな人生を送ることになるのだろうか？ それは辛いことなのかな？ それとも、本当はとても幸せなことなのかな？

「——ポチ、見つけた」

それは希望か絶望か。ゆっくりと開かれるクローゼットの向こうから、白く眩い光が体を包む。



……み。

……み。

「ちよつと泉？ 大丈夫？」
「ふえ……ヒナちゃん……？」

ヒナちゃんが私の顔を覗き込み、呆れているような、心配しているような表情を向けていた。頭がぼーっとして、しばらく何も考えられそうにない。

「もう……気持ちよさそうに寝てたから起こさないでおいたけど、突然うなされ始めるからビックリしたじやな

い」

「ありや……じゆるる。私寝ちやってたんだあ。起こしてくれてありがとうヒナちゃ……ふああ」

少しずつ思い出してくる。私はヒナちゃんに頼まれた書類の山を片付けるべく、生徒会長の椅子に座った。椅子に座って……それで、なんだかんだあって作業が進まなかったんだ。そして、そのまま寝てしまったと……。面
目次第もございません。

「ま、あまり期待はしてなかったんだけどね。ところで本当にすごいうなされてたけど、どんな夢を見てたの？」

「それがね……」

「うん……」

「……あれ、どんな夢だったっけ？」

「忘れたのね……。まあ良かったじやない。嫌な夢なら忘れることができて」

「うん……。まあ、そうだね」

私は確かに、長い夢を見ていた。楽しい夢なのか怖い夢なのか、それさえも思い出せない。ただ物凄く衝撃的で、忘れるとは思えないような夢だった……はず。

夢の内容を思い出せずに悶々としてしていると、エレベータが開く音がした。

「あら愛歌さん。何か忘れ物ですか？」

「ええ、ちよつと……。またすぐに帰るわ」

「ゆつくり休養してくださいね。あつ、そうだ泉！あなたにやつといてつて渡した書類、全部愛歌さんがやってくれたのよ」

そう言われてから、たしかに机の上に出したはずの書類が無くなっていることに気づく。

「え、本当!? うわーん、ありがとう愛歌さまア！」

「ふふふ、お礼を言うのはこっちの方よ」

「え？」

「かわいい寝顔が見られたから」

「えええええ!？」

ニッコリと笑顔を向けられて恥ずかしくなる。私は一体どんな寝顔をしていたんだろう……。恥ずかしい。でも、私がやるべき書類を代わってくれたんだから、これくらい安い対価なのかな。

「ふふつ、じゃあ私はこれで」

「お疲れさまです、愛歌さん」

忘れ物を回収し終えたのを見届けてから、ヒナちゃんが手を振る。私ももう一度お礼が言いたくて、椅子から立ち上がり、エレベータ前まで進む。

「本っ当にありがとうね！ また明日！」

精一杯の感謝を込めて手を振った。愛歌さまはふつと微笑んでから、愛おしげな目をする。それはヒナちゃんへと向けるソレとは違っていて、どこか特別な想いを含んでいるような……。何かの思い出を通して見ているような――。

「ええ。また明日、会いましょうね……。ポチ」

エレベータの扉の向こうへと消えてく愛歌さま。その手には、取りに戻った忘れ物が握られている。それはゾウのような鼻に、ウシのような尻尾。爪はトラのように鋭く、クマのようながっしりとした肉体。見覚えのあるよ

うな、ないような、不思議なブロンズ像だった。

完

著者あとがき & メッセージ

【霞煌さん】

どうも、霞煌です。ちゃんと後書きを書くのは初めてですね。ちよくちよく合同本に挿絵や表紙を描いている大和撫子という名前の人と同一人物です（笑）昔の合同本に載っている自分の絵を振り返ってみると段々成長してるのを実感しますね、嬉しい限りです。今回は「ラノベ風」というテーマで描きました、皆さんラノベの表紙に見えましたか？塗りも今回はアニメ塗りではなくギャルゲ塗りにしようとしたのですが難しいもので理想の6割のできとなりました。それでも今までで一番の出来です。いつか商業レベルの絵を描けるよう精進します、ではまた。

【RIDEさん】

どうも、RIDEです。

今回の話は「23分間の奇跡」の話をもとに、文を主役に据えて執筆しました。人の心を掌握するのは、23分もあれば十分と言うダークな感じの話ですが、文なら23分とかからずに自分のペーパーに巻き込ませるかも…

政治家がぼろを出してしまうというのもある漫画からです。

文を書くのは難しかったです。

ギャグを書くのは難しかったです。

けど、チャットで難しく考えない方がいいとアドバイスをいただいたので、その通りに書きました。皆さん、ありがとうございます。

こんな文でも楽しんでいただけたら嬉しいです。それでは

【ロッキー・ラックーンさん】

こんにちは、ロッキー・ラックーンです。にゃんぱすー！合同本の刊行おめでとうございます。

今回のクイズ大会もかろうじて優勝する事ができ、とてもホッとしています。SSのネタは大会以前から練っていたものだったので、無駄にならずに済みました。さらには、事前からイラストをお願いしていたPすけ殿の労力も…。(笑)

さて内容について。クリスマス合同本に続き、他作品アリスちゃんを登場させたいという願望からこうなりました。京都への旅に辞書を持ってきたヒナと、お友達の家に泊まりに行くのに国語辞典を持って行こうとしたきんモザアリスちゃんの二人であれば大親友になれるのではないかと思つて妄想を膨らませました。作品内では言及していませんが、今回もハヤテ側メンバーは自身の連載のキャラ設定のつもりで書いていますので、ヒナが終始嬉しそうなのは、アリスちゃんの母親として、きんモザアリスちゃんを重ねているからという事になっております。あとカレンちゃんもきんモザで一番好きなので出しかっただけです。

そして、Pすけさんのイラスト！幾度と無くイメージをメールでやり取りして描いて頂いた物です。最後のコマの嬉しそうな二人がイメージとぴったりで。とつても可愛いですね！！毎回ステキな絵をありがとうございます。お礼になんでも(略)

最後にタイトルなんですが、「さくらいろ」↓ヒナの髪の色、「無修正」↓モザイクにあやかっつて、という感じです。

特に「無修正」な要素が無いのは、きんモザに特にモザイク要素が無いのと同じです。

それでは、読んで頂いた皆様、編集の双剣士殿、毎度ステキなイラストを描いてくださるPすけ殿をはじめとした止まり木の皆様、ありがとうございました。またの機会にお会いしましょう。

おわり

【Pすけさん】

みなさまあらためまして。小説での参加は少ないわりに、イラストを描いて名前を乗せるコバンザメことPすけです。

ロッキー・ラックーンさんの新作小説ということ、きんいろモザイクリスペクトで四コマ形式をとってみました。ゆるーい画風なので色々突っ込みどころはあると思いますが、僅かでも可愛らしい小説を引き立てられていたら、それはとってもうれしいなって思ってしまうのでした。

【torbion さん】

こんにちは。いつもはチャットでお世話になっております、torbionです。いつもは読むだけで、今回の書くことが難しく感じます。

今回、咲夜を笑わせようとして変なことをするというのがなぜか思いつてしまった結果、こうなってしまうました。ストーリーは上手く表現できないし、関西弁は難しいし……。こ、これから練習してけばいいよね。

それではこれで失礼します。この合同本を楽しんで読んでいただければ幸いです。

【タツキーさん】

どうも、タツキーです

今回はクイズ大会で2位ということで合同本への参加権をいただきました。転載枠として載せてもらった『それはまるで魔法のよう』はぶつちやけ一番無難（文章的に）という理由で選んだんですが、楽しんでいただければ幸いです。

自分で挿絵も描こうかなあとか思ってたんですけど、試験とかいろいろあったんで今回は間に合いませんでした（描いていたとは言っていない）

なんにせよ、今回の合同本に自分の作品が載っていることを大変嬉しく思っています。また機会があれば参加したいです。

それでは

【きはさん】

にゃんぱすー。きはと申します。第三回以来の久々の参加であります。

今回の第七回に至るまでは、本当に様々なことがありました。書き手として一線を退き、衝動的に過去作を削除し

て、双剣士さんをはじめ様々な方にご迷惑とご心配をおかけしたことかと思えます。

……ホント、いろいろあったなあ〜（遠い目）

そんな中で、約一年ぶりの小説となりました。三千字ほどの掌編小説ではありませんが、時間のある時にでも読んでいただければ幸いです。

今後は書き手として掲示板のほうで復活できればなあ〜と考える次第です。（書くとは言ってない

では、おにやんばすー。

【充電池さん】

初めての入賞、初めての合同本、そして初めての小説投稿に感激している充電池です。当初はひなゆめ時代の小説に少しアレンジを加えたものと考えていたのですが、いつの間にやら新作となりました。次々にアイデアが浮かぶあの感覚、久しぶりに感じられて楽しかったです。

さて、今作の内容は要約すると、『愛犬を失い悲しみに暮れる愛歌に対し、泉が不用意な発言をする。そのたった一言が引き金となり、愛歌はとある大胆な行動に出る。泉はその被害者となる』みたいな感じでしょうか。原作の愛歌さんからは想像もできない行動を、勝手に作ってしまったのが二次創作のいいところですねえ（元のキャラを把握し切れていない感もあります）。

ジャンルとしては、ギャグありシリアスあり、ホラー（？）あり、感動あり、みたいな……。「世にも奇妙な物語」っぽさを少し意識してみました。終盤の、愛歌さんがエレベーターに乗り込みカメラが右手の銅像に向けられたあたり

で、例の世にも奇妙なメロディが流れるようなイメージです。このお話のカギとなるバクの銅像、ラムネ、そして夢と現実……うまく表現できたでしょうか……？

ともあれ、無事完成、納得のいく形で掲載が実現して嬉しさいっぱいです。また機会があれば頑張って書いてみようと思います。それではー。

編集後記

半年ぶりのご無沙汰でありました。2015年GW記念として開催した第7回クイズ大会入賞者による合同本をお届けします。今回は管理人の個人的都合もあり入賞者へのフォローが十分ではなかったのですが、その分みなさんで進捗を確認しあい励ましあってくださったお蔭で、入賞者が全員揃っての発行にこぎつけました。

執筆に携わってくださった皆様、そして応援してくださいくださった方々に御礼申し上げます。

今年の夏は早くも猛暑の兆しが見えつつありますが、止まり木のほうも第3回ワイ杯や第3回の有志合同本、そしてRPGやWebラジオなどの定例企画に加えてカードゲーム等も控えたイベント盛りだくさんの夏になりそうです。少し残念なのは去年の今頃にやってたイラスト描き養成企画が復活の兆しを見せないことですが、期間限定で会員制ページに閉じこもるよりチャットルームに描いた絵を貼って意見をもらおうというスタイルが性に合う方が多いようなので、しばらく静観しようかと思えます。涼しくなる秋ごろに合同イラスト本でもやろうかと。

あー、それにしても私も底冷えのする話を書きたくなってきたな♪

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.07

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2015年6月14日